

木舟・三本松遺跡 III

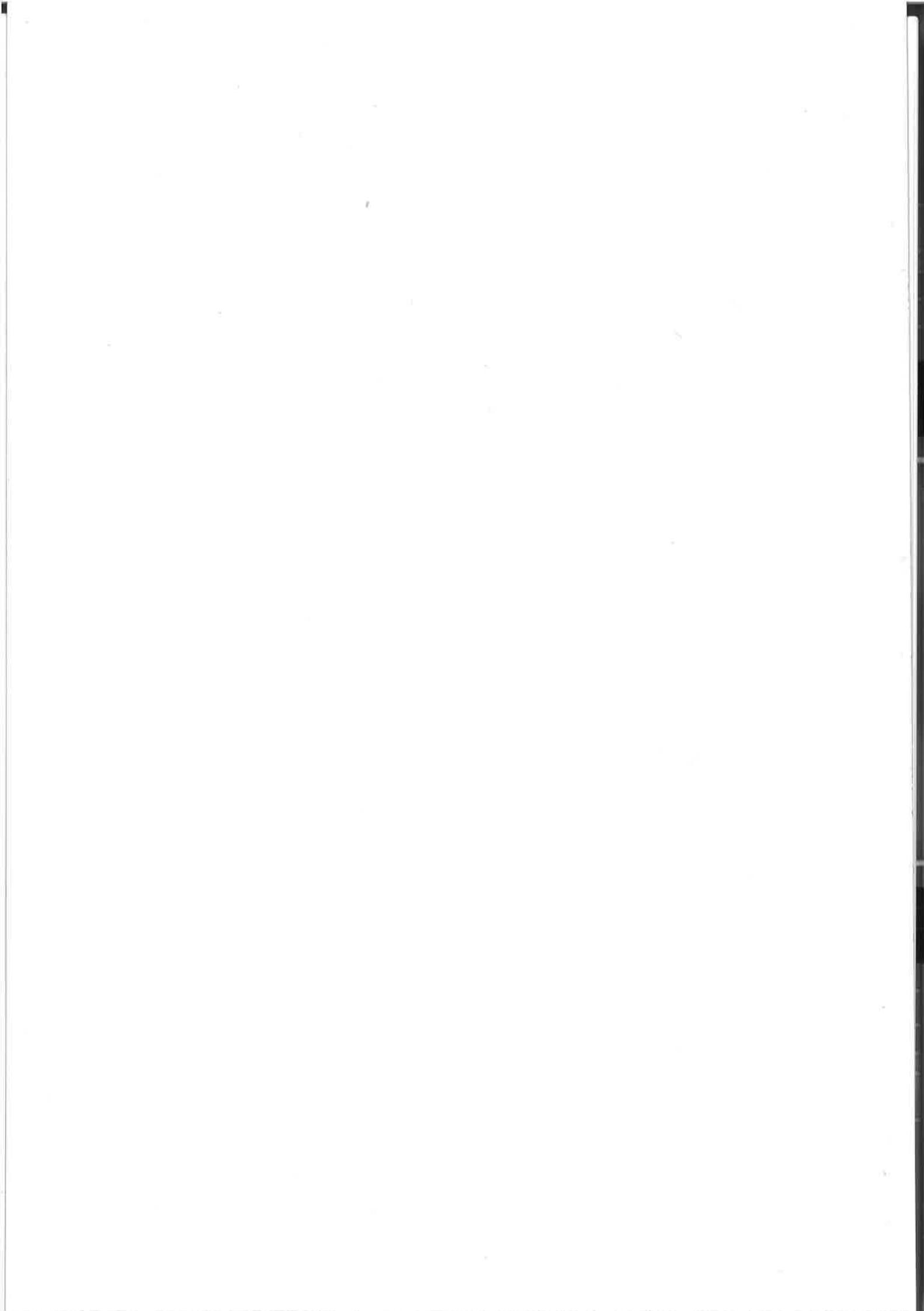
—福岡県糸島郡二丈町所在／木舟・三本松遺跡 3 次調査—

二丈町文化財調査報告書

第 15 集

1 9 9 7

二丈町教育委員会



木舟・三本松遺跡 III

—福岡県糸島郡二丈町所在／木舟・三本松遺跡 3次調査—

二丈町文化財調査報告書

第 15 集

1 9 9 7

二丈町教育委員会

序

この報告書は、平成 7 年度をもって終了した深江地区ほ場整備に關係する埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

本書が考古学研究の基礎資料の一つとなり、文化財の保護と活用に広く利用されることを願います。

平成 9 年 3 月 31 日

二丈町教育委員会

教育長 吉 村 昌 幸

例　　言

1. 本書は深江地区県営は場整備事業に伴い、二丈町教育委員会が平成7年度において国庫、県費補助を受けて発掘調査を実施した、二丈町大字深江字木舟、字柴添に所在する木舟・三本松遺跡3次調査の報告書である。
2. 発掘調査は二丈町教育委員会　村上　敦　が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、津國　豊の協力を得て村上が行ない、製図は村上が行なった。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成、製図は村上が行ない、一部の石器については津國の協力を得た。
5. 遺構・遺物の写真撮影は村上が行ない、空中写真は(株)スカイサーベイ　森馨氏に委託した。
6. 本書に用いた方位は、全て座標北である。
7. 本書の執筆編集は村上が行なった。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の期間と調査組織.....	1
3. 遺跡の位置と環境.....	2
II. 発掘調査の記録	6
1. はじめに.....	6
2. 弥生時代の遺構と遺物.....	8
3. 歴史時代の遺構と遺物.....	19
III. おわりに.....	39

挿 図 目 次

第1図	周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）	3
第2図	深江地区ほ場整備関係調査遺跡位置図（縮尺1/5,000）	4
第3図	遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）	5
第4図	遺構配置図（縮尺1/400）	7
第5図	68号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	8
第6図	68号甕棺墓実測図（縮尺1/8）	8
第7図	68号甕棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺1/1）	9
第8図	69号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	9
第9図	69号甕棺実測図（縮尺1/8）	9
第10図	70号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	10
第11図	70号甕棺実測図（縮尺1/8）	10
第12図	71号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	11
第13図	71号甕棺実測図（縮尺1/8）	11
第14図	72号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	12
第15図	72号甕棺実測図（縮尺1/8）	12
第16図	72号甕棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺1/1）	12
第17図	73号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	13
第18図	73号甕棺実測図（縮尺1/8）	13
第19図	74号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	13
第20図	74号甕棺実測図（縮尺1/8）	13
第21図	75号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	14
第22図	75号甕棺実測図（縮尺1/8）	14
第23図	76号甕棺墓実測図（縮尺1/20）	15
第24図	76号甕棺実測図（縮尺1/8）	15
第25図	S K-01実測図（縮尺1/30）	16
第26図	S K-01出土遺物実測図・1（縮尺1/4）	17
第27図	S K-01出土遺物実測図・2（縮尺1/4, 1/6）	18
第28図	S T-01（木棺墓）実測図（縮尺1/20）	19
第29図	S T-01遺物出土状況（縮尺1/10）	20
第30図	S T-01出土白磁実測図（縮尺1/3）	20
第31図	S T-01出土土錘実測図（縮尺1/2）	21
第32図	S T-01出土石錘実測図（縮尺1/2）	21
第33図	S D-01出土遺物実測図・1（縮尺1/3）	24

第34図 SD-01出土遺物実測図・2 (縮尺1/3)	26
第35図 SD-01出土遺物実測図・3 (縮尺1/3)	27
第36図 SD-01出土遺物実測図・4 (縮尺1/3)	28
第37図 SD-02土層観察図 (縮尺1/40)	29
第38図 SD-01出土遺物実測図・5 (縮尺1/2)	30
第39図 SD-02出土遺物実測図・1 (縮尺1/3)	31
第40図 SD-02出土遺物実測図・2 (縮尺1/3)	32
第41図 1, 2号大石実測図 (縮尺1/30)	33
第42図 3, 4号大石実測図 (縮尺1/30)	34
第43図 SX-01, SK-02~05実測図 (縮尺1/50)	35
第44図 SK-06, 07実測図 (縮尺1/50)	36
第45図 SK-08実測図 (縮尺1/20)	37
第46図 SK-09, 10実測図 (縮尺1/40)	37
第47図 SX-01, SK-02, 03出土遺物実測図 (縮尺1/3)	38

表 目 次

表1 深江地区ほ場関係発掘調査遺跡一覧	2
表2 68号甕棺墓棺内出土管玉計測表	9
表3 木舟・三本松遺跡甕棺墓一覧表	15
表4 ST-01(木棺墓)出土土錐計測表	20
表5 ST-01(木棺墓)出土石錐計測表	22

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成3年度より開始された深江地区の大規模区画整備事業は、平成7年度をもって主たる工事を完了した。過去千数百年にわたり、人力によって徐々に改変されてきたなだらかに起伏する自然的な水田風景は、機械力の導入により一挙に平坦化され、一枚1万m²にも及ぶ広大な耕作面を誕生させた。後継者不足の解消、経営の合理化を担ったこの大事業により、農業は二丈町の基幹産業としての位置付けを不動のものにすることになり、今後数十年間はこの現状は変わらないものと予想される。また、この事業により過去5年間の間に約30,000m²の遺跡が記録保存処置の対象となり、発掘調査が行なわれた後、削平され、失われている。

木舟・三本松遺跡は、平成4年に1次調査（平成5年度報告）、平成6年に2次調査（平成7年度報告）が行われ、約60基の弥生時代中期の甕棺墓に伴い、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、磨製石劍等の副葬品が出土しており、糸島地区における弥生時代中期の墓制に重要な位置を占めている。今回報告する3次調査地点は、2次調査地点の西側に接する地点にあたり、1、2次調査の直接的原因となった水路建設に付随する原因により削平を免れない状況にあり、平成7年度事業として発掘調査を行なったものである。

2. 発掘調査の期間と組織

調査期間

1995（平成7）年11月14日～1996（平成8）年1月31日

調査組織

二丈町教育委員会	教 育 長	吉村 昌幸
	教 育 課 長	空閑 俊明
	教育課長補佐	清水 泰二
	社会教育係長	瀬戸 利三
	社会教育係主事	村上 敦（調査担当）

発掘作業従事者

内田京子、内田美智子、須古井節子、田中栄一、田中和子、田中ミヨ子、田中靖子、古川智恵子、松村マサ子、石橋順子、江藤良子、川村真理、木下知子、高嶋律子、筒井晴代、古藤律子、小林 豊、山本 繁

遺物整理作業従事者

木下文子、古藤紀子、山本 繁

なお、このほ場整備事業に関わる埋蔵文化財の発掘調査においては、福岡県福岡農林事務所 関 保昌氏の尽力に頼るところが大きいものであった。氏の文化財行政に対するご理解と努力に感謝いたします。

3. 遺跡の位置と環境

木舟・三本松遺跡は、二丈町の中心的水田地帯である一貴山・深江平野の西域に位置する。この平野は、山裾の洪積地、背振山系より流出する一貴山川などの河川によって成る沖積地に分けられ、沖積地の大部分は砂堆帯、及びにその背面に形成される旧ラグーンなどによって形成される。平野の南域にあたる洪積地においては、遅くとも縄文時代後期中頃の北久根山式土器の段階においては集落の存在（上深江・小西遺跡）が確認され、弥生時代早期の稻作の開始期に至っては、いち早く積極的に外来文化を受容、内在的文化と融合させることにより、弥生文化の萌芽と成立に重要な位置を占める大集落（石崎地区遺跡群、上深江・小西遺跡）が形成される。古墳時代の集落についてはこれまでには明確なものが確認されていないが、平野部周辺には徳正寺山古墳、一貴山・銚子塚古墳、波呂・二塚古墳等の前期から後期にかけての前方後円墳が存在しており、有力な遺跡の存在が予想される。また、古代から中世にかけては、良質な砂鉄資源に恵まれた糸島地方の地の利を生かし、製鉄から製品化までが一貫して行われ、周辺地域に供給されていたものと考えられる（曲り田周辺遺跡、森田遺跡）。

一方、砂堆帯は縄文海進のピーク期以降の海退期に徐々に形成されたものであると考えられ、縄文時代晚期前半以前の明確な遺構、遺物は確認されておらず、砂堆帯の土地利用に明確な痕跡が確認されるのは弥生時代中期以降である。しかしそれ以降については盛んな土地利用状況の痕跡が窺え、深江地区西端部において、5世紀代の古墳群と、6世紀代の集落の存在、7世紀末から8世紀初頭にかけての官衙遺跡が確認されている（塚田南遺跡）。この塚田南遺跡については資料整理が殆ど行なわれておらず、現時点では不明瞭な点が多いが、芯々幅6m以上の古代道路とそれに伴う大型掘立柱建物跡群が検出されており、万葉集に記載される深江駿家である可能性を指摘されている。

表1 深江地区は場整備関係発掘調査遺跡一覧

調査地點	遺跡名	調査年度	調査面積(m ²)	調査主体	主な時代	主な遺構	主な遺物	報告書	備考
I	木舟・三本松遺跡	1991	3,000	二丈町教育委員会	弥生中期	甕棺墓	硬玉製勾玉、磨製石剣、等	「木舟・三本松遺跡」1994	1次調査
II	木舟・三本松遺跡	1994	2,850	二丈町教育委員会	弥生中期 11世紀	甕棺墓 土壙群	碧玉製管玉、等 土師器、等	「木舟・三本松遺跡II」1996	2次調査
III	木舟・三本松遺跡	1995	3,600	二丈町教育委員会		本報告			3次調査
IV	木舟の森遺跡	1992	7,000	二丈町教育委員会	12世紀	館跡に伴う溝状遺構	輸入陶磁器、畿内系瓦器	「木舟の森遺跡」1995	
V	上深江・小西遺跡	1993	3,240	二丈町教育委員会	縄文後期 弥生早期	堅穴住居 掘立柱建物	縦長剥片 柱根	未報告	
VI	深江・中道遺跡	1995	4,200	二丈町教育委員会	縄文～古墳	溝状遺構	注口土器	未報告	
VII	森田遺跡	1995	5,400	二丈町教育委員会	13世紀	製鉄炉、精練炉、土葬墓	鉄滓、古錢、青磁	未報告	

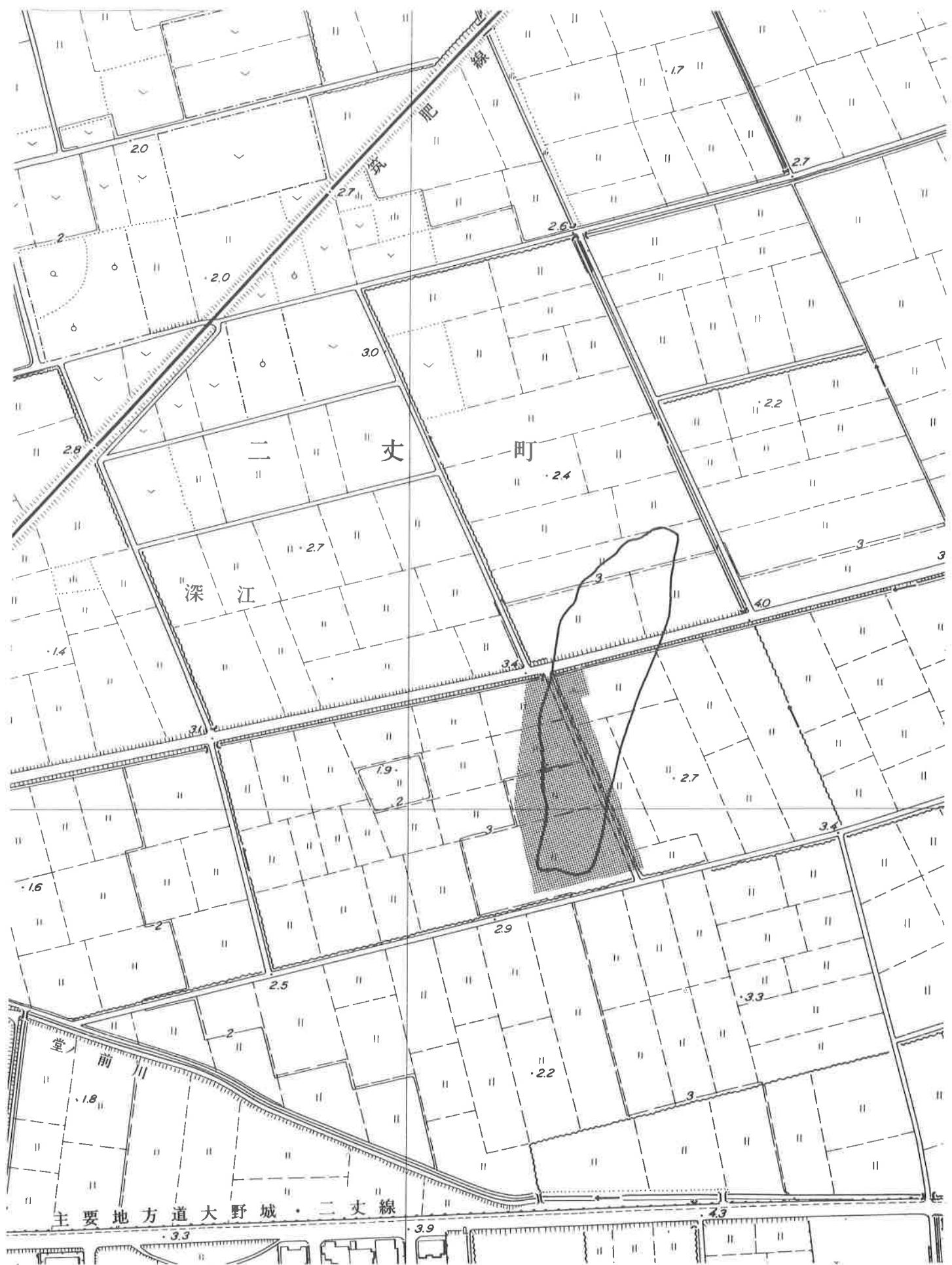


- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 木舟・三本松遺跡 | 2. 木舟の森遺跡 | 3. 上深江・小西遺跡 | 4. 深江・井牟田遺跡 |
| 5. 石崎・曲り田遺跡 | 6. 石崎・矢風遺跡 | 7. 德正寺山古墳 | 8. 波呂・二塚古墳 |
| 9. 一貴山・銚子塚古墳 | 10. 深江・中道遺跡 | 11. 森田遺跡 | 12. 塚田南遺跡 |

第1図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）



第2図 深江地区は場整備関係調査遺跡位置図（縮尺 1/5,000）



II. 発掘調査の記録

1. はじめに

平成7年度は深江地区は場整備事業における面工事の最終年度にあたり、前年度に行なった試掘調査によって約30,000m²の範囲において遺跡の存在が確認されていた。二丈町教育委員会にはその当時2人の文化財担当者が配置されていたが、他の事業との兼ね合いもあり、これらの発掘調査に十分な態勢で対処できる状況になく、福岡県福岡農林事務所に対し、盛土などによる遺跡の現状保存を要請した。その結果、大幅な調査面積の縮小が計られたものの、13,200m²の面積は発掘調査の対象とせざるを得ない結果となった。木舟・三本松遺跡3次調査地点は、このうちの3,600m²にあたり、平成7年11月14日より調査を開始した。

調査ではまず、1, 2次調査によって確認されていた旧砂丘の範囲を示す緩斜面の検出から行なった。遺構面の大半は強風によって風紋が生じるほどの目の細かい砂地であり、旧砂丘の周辺に堆積している黒色粘質土との区別は比較的明瞭であった。その結果、舌状に張り出しているものと考えていた旧砂丘は、周辺を完全に湿地に囲まれた島状を呈していることが確認された。この旧砂丘は弥生時代以降、徐々に周辺部が陸地化し、遅くとも平安時代以降には現在のような地形に近いものになっていたものと考えられる。

出土遺物の年代は、弥生時代前期から中世までの雑多な時期のものであるが、明確な遺構として捉えることができるものは、弥生時代中期の甕棺墓群、並びに平安時代の遺構である。

弥生時代中期の甕棺墓群は旧砂丘の主軸線上に散発的に見られ、計9基が検出されたが、個々を取り巻く小群として捉えることができるものは2次調査区に接した数基のみであり、このうちK-68からは19点の碧玉製管玉が、K-73からは1点の黒曜石製の打製石鏃が検出された。甕棺墓は削平により完全に失われたものもあり、検出された以外にも甕棺墓が存在していたものと考えられるが、2, 3次調査地点の標高が1次調査区のものよりも僅かに高く削平による影響を受けやすい状況にあったことを勘案しても、表土、包含層、後世の遺構埋土などに含まれる甕棺の破片は圧倒的に1次調査区の方が多く、墓群の中心部は旧砂丘の北部域に位置する1次調査区内に存在していたと考えることが妥当であろう。

今回報告する3次調査区内における中心的な遺構は平安時代後半のものであり、2条の溝状遺構、及び1基の木棺墓などが検出された。これらの溝状遺構は互いにほぼ直交する主軸線をもち、やや不整形ながら方形区画を企図したものであると思われ、それに伴い、東部、南部の緩斜面の整形が行なわれた可能性も考えられる。また、区画域内とその北側には多数の柱穴が検出されており複数の建物が存在していたであろうことが予想されるが、著しい削平により明確に建物跡として認識できるものではなく、その配置等を復元するには至らなかった。木棺墓には底板、及びに側板の一部が残されており、頭部付近には白磁碗1点、並びに二十数個の土錘、滑石製石錘が副葬されていた。さらに、明確な遺構は伴わないものの、調査区の北部からは製鉄関連遺物が出土しており、小鍛冶程度の製鉄作業が行なわれていたものと考えられる。

また、1次調査において数基の大石が検出されているが、これと同等の規模をもつ大石が調査区の北部、並びに南部において検出された。破壊された支石墓の上石であるものと考えており、1次調査と同様に下部構造は認められなかった。



第4図 遺構配置図（縮尺1/400）

2. 弥生時代の遺構と遺物

3次調査区からは9基の甕棺墓が検出され、墓群全体としては計69基の甕棺墓が確認された。甕棺墓の遺構番号は1次調査からの連続したものと付し、表3に一覧表として掲載しているが、36, 47, 53, 55~58番は欠番となっている。これらは当初、甕棺墓として検出していながら、その後の調査によって元位置を保っていないものと判断したものなどである。また、主軸方位については、過去の報告に誤りが確認されたため、正確なものに修正して記載している。

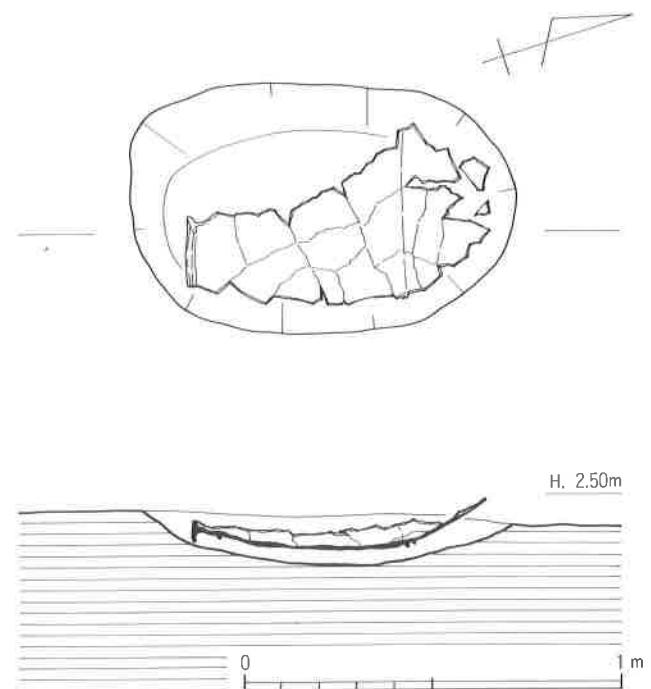
68号甕棺墓

調査区の北東部に位置する成人棺であるが、削平により下甕と思われる棺体の一部が残されるのみである。重機による表土除去後、遺構精査以前に強風によって姿を表したものであり、同時に碧玉製管玉数点が棺周辺に散乱している様子が観察された。

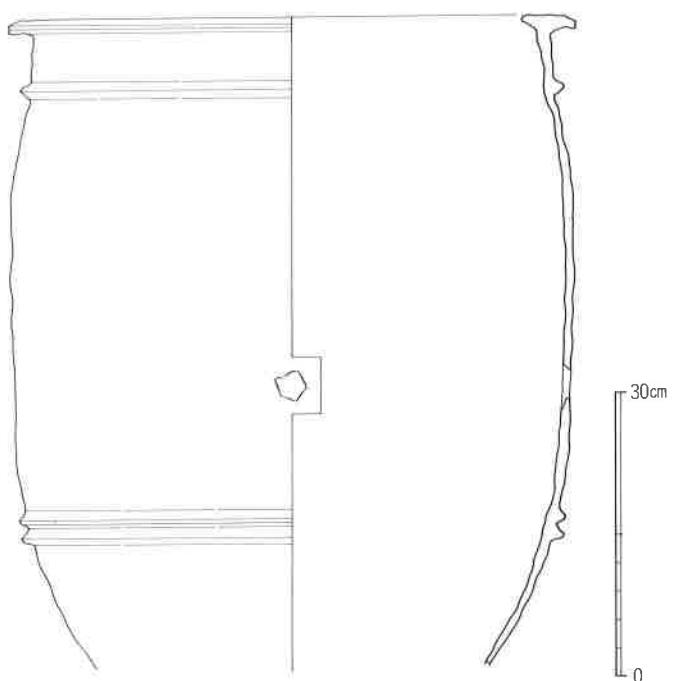
また、棺内に埋まっている砂をフリイに掛けたところ、さらに十数点の管玉が確認され、計19点の管玉が出土した。残存墓壙は長径103cm、短径66cmの楕円形を呈し、主軸方位はN-72°-Wを示し、棺体はほぼ水平に埋置される。

(68号甕棺)

削平により棺体の2/3以上が失われ、底部付近は完全に欠損する。口縁部は外側により強く張り出す断面T字状を呈し、口径60.2cmに復元される。口縁部下に1条、胴部に2条の凸帯が巡り、凸帯の先端は丸みを帯び、三角凸帯から台形凸帯への移行期における後半期の形状を呈する。また、胴部凸帯の10cm程上位に内側からの穿孔が施される。



第5図 68号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第6図 68号甕棺墓実測図（縮尺1/8）

(棺内出土遺物)

計19点の碧玉製管玉が出土した。連結すると径7～8cmの輪状に復元が可能であり、腕輪として用いられていたものであると考えられる。

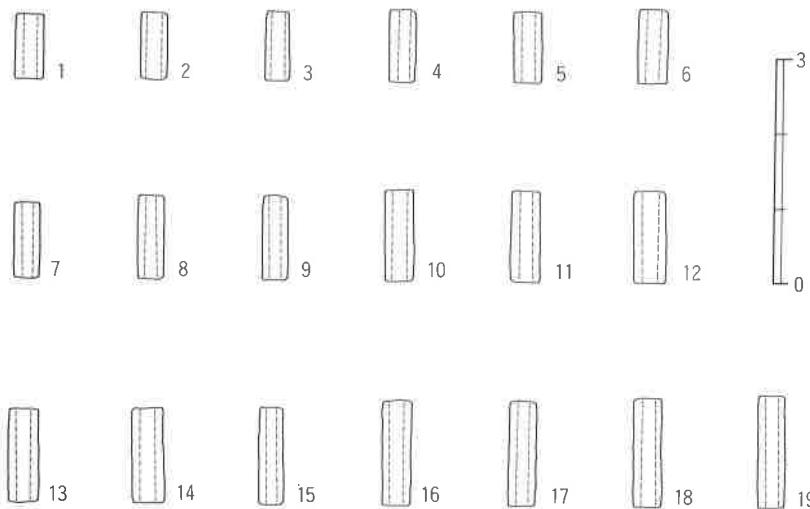


表2 68号玉棺墓出土管玉計測表 (mm)

番号	長さ	径	番号	長さ	径
1	8.6	3.8	11	12.3	4.0
2	9.0	3.6	12	12.3	4.3
3	9.3	3.3	13	12.5	4.2
4	9.6	3.7	14	12.6	4.3
5	9.7	3.7	15	13.0	3.3
6	10.0	4.0	16	14.2	4.0
7	10.3	3.3	17	14.2	3.7
8	11.3	3.5	18	14.7	3.8
9	11.3	3.3	19	15.0	3.7
10	12.3	3.8			

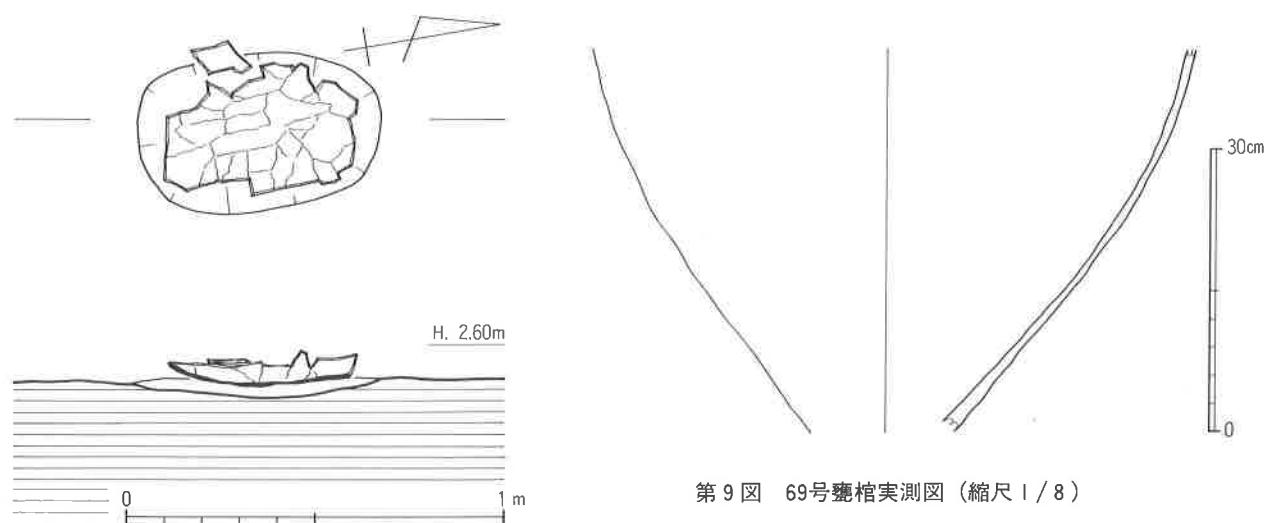
第7図 68号玉棺墓内出土遺物実測図 (縮尺1/1)

69号玉棺墓

調査区の北東部に位置する。削平により下蓋と思われる棺体の一部が残されるのみである。残存する墓壙は長径65cm、短径42cmの楕円形を呈する。棺体の主軸方向はS-10°-Wを示し、ほぼ水平に近い傾斜角をもって埋置されていたものと思われる。

(69号玉棺)

削平により棺体の3/4以上が失われ、胴部凸帯部以上の全てと、底部を完全に欠損している。内外面ともにナデ仕上げされており、器表の色調は外面は暗褐色、内面は暗白褐色を呈する。



第9図 69号玉棺実測図 (縮尺1/8)

第8図 69号玉棺墓実測図 (縮尺1/20)

70号甕棺墓

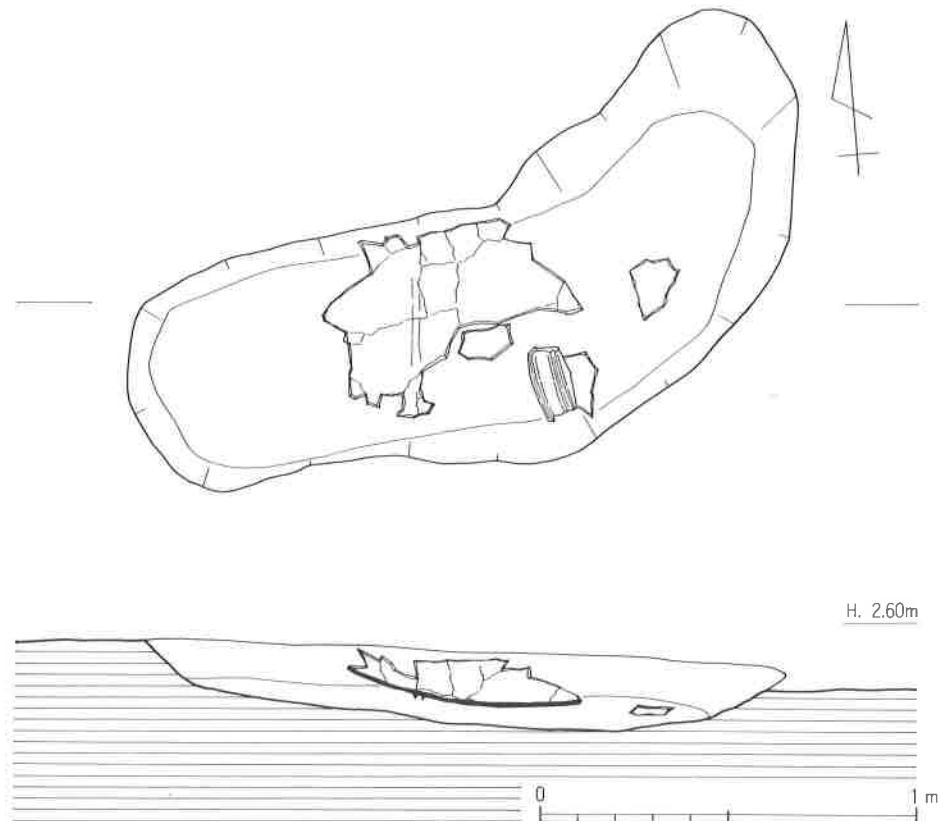
調査区の北東部に位置する。削平、並びに搅乱により棺体の大部分を失っている。墓壙は搅乱を受けているが、下甕と思われる大形甕の胴部と、上甕と思われる鉢の口縁部が残されていた。上甕は元位置を動いているものの、下甕は比較的しっかりと墓壙の埋土に張り付いており、主軸方向は下甕の棺体より導き出したもので、S-85°-Eを示し、ほぼ水平に近い角度をもって埋置されていたものと思われる。

(70号甕棺上甕)

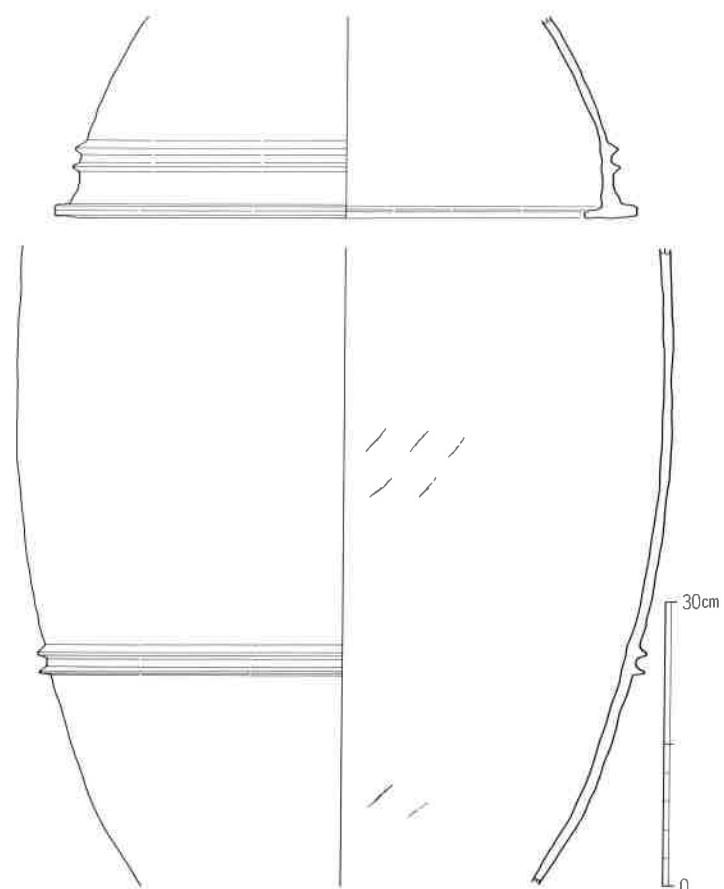
大型の鉢形土器であり、口径61.6cmに復元される。口縁部は断面T字状を呈し、その下位に2条の断面三角凸帯が付される。内外面ともにナデ仕上げされ、器表の色調は外面燈褐色、内面白褐色を呈する。

(70号甕棺下甕)

胴部に2条の断面三角凸帯が巡り、凸帯部径は64.4cmに復元される。図示した胴部の傾きは確定的なものではなく、もう少し上部が窄まる可能性もある。内外面ともにナデ仕上げされるが、内面にはハケ調整段階における工具痕が残される。器表の色調は外面燈褐色、内面白褐色を呈する。



第10図 70号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）



第11図 70号甕棺実測図（縮尺 1/8）

71号甕棺墓

調査区の北東部に位置する。上甕に頸部より上位を打欠いた壺形土器、下甕の大型の専用棺を用いたもので、上甕は下甕の中に挿入されている。残存する墓壙は長軸94cm、単軸57cmの楕円形状を呈し、棺体の主軸方向はS-84°-Eを示す。水平に近い傾斜角度をもって埋置されていたものと思われる。

(71号甕棺上甕)

大型の壺形土器であり、頸部より上位が打ち欠かれている。胴部最大径は49.6cmに復元され、胴部上位に2条の断面M字凸帯が巡る。内外面ともにナデ仕上げされているが、内面は剥離が著しく不明瞭である。器表の色調は外面暗燈褐色、内面淡橙白褐色を呈する。

(71号甕棺下甕)

口径63.2cmに復元される専用棺である。口縁部は内側により強く張り出す断面T字状を呈し、口縁部下に凸帯は付されない。内外面ともにナデ仕上げされ、器表の色調は外面暗黃褐色、内面淡橙白褐色を呈し、外面には黒色塗料が塗布されていた可能性がある。

72号甕棺墓

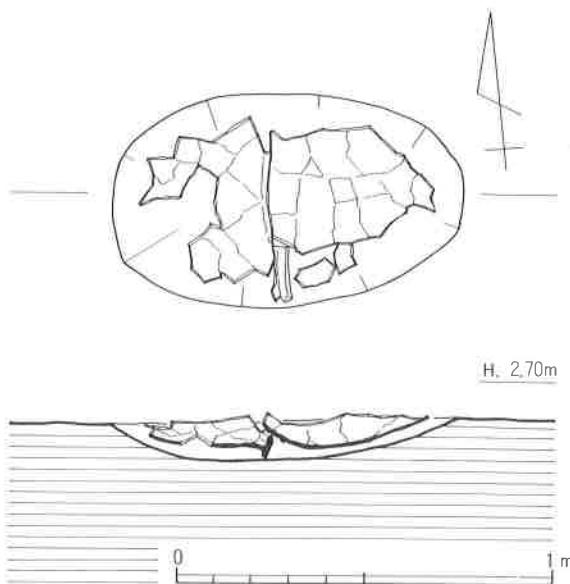
調査区の北東部に位置する合口式の甕棺墓であり、上甕に鉢形土器、下甕に専用棺が用いられる。残存する墓壙は長径83cm、短径55cmの楕円形状を呈する。主軸方向はS-78°-Eを示し、水平に近い傾斜角度をもって埋置されていたものと思われる。

(72号甕棺上甕)

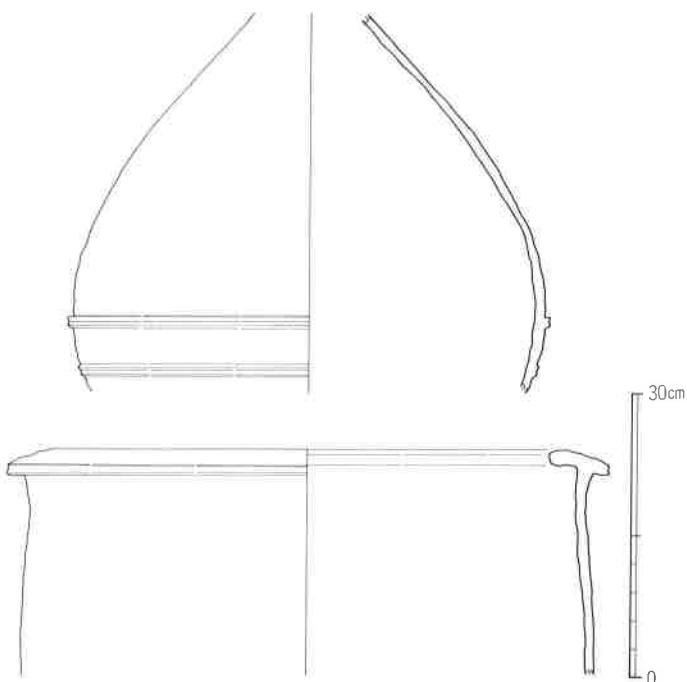
大型の鉢形土器であり、口径74.8cmに復元される。口縁部は外側により強く張り出す断面T字状を呈し、その直下に先端の鋭い2条の断面三角凸帯が巡る。内外面ともにナデ仕上げされ、器表の色調は、外面燈褐色、内面白褐色を呈する。

(72号甕棺下甕)

専用棺であり、口径58.0cmに復元される。口縁部は外側により強く張り出す断面T字状を呈し、胴部に先端の鋭い2条の断面三角凸帯が付される。胴部最大径位は口縁部と凸帯部の中間に位置し、そこから口縁部までは内湾しながら立ち上がる。内外面ともにナデ仕上げされ、

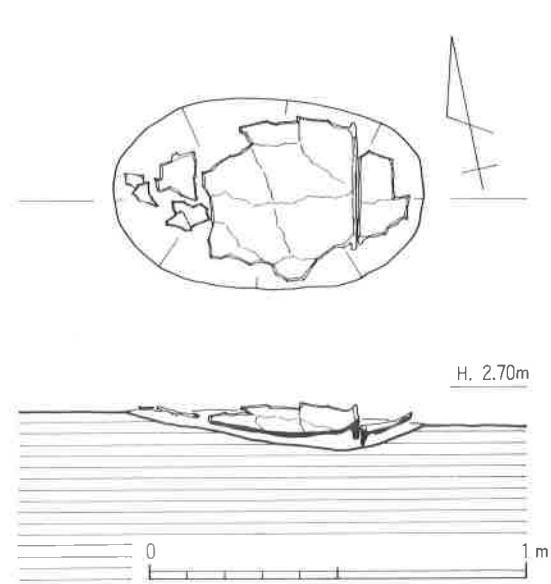


第12図 71号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

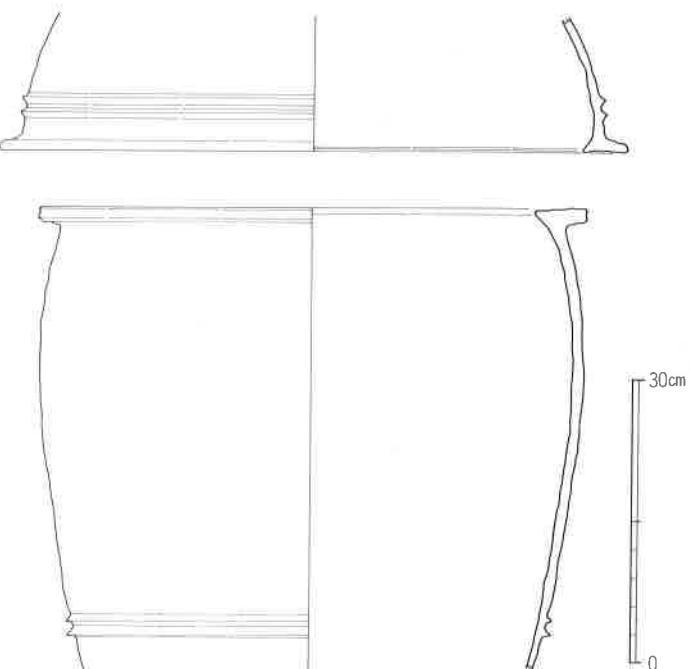


第13図 71号甕棺実測図（縮尺1/8）

器表の色調は、内外面ともに燈褐色を呈する。



第14図 72号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第15図 72号甕棺実測図（縮尺1/8）

73号甕棺墓

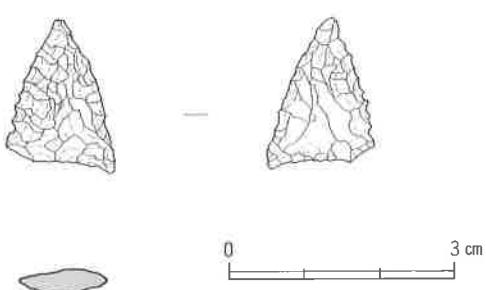
調査区の北東部に位置する成人棺である。72号甕棺墓の南約1mに近接し、主軸方向も平行に近い。残存墓壙は長径80cm、短径55cmの不整楕円形を呈し、下甕と思われる大形棺が残される。主軸方向はN-85°-Eを示し、水平に近い傾斜角度をもって埋置される。また、棺内埋土からは黒曜石製の打製石鏃1点が検出された。

(73号甕棺)

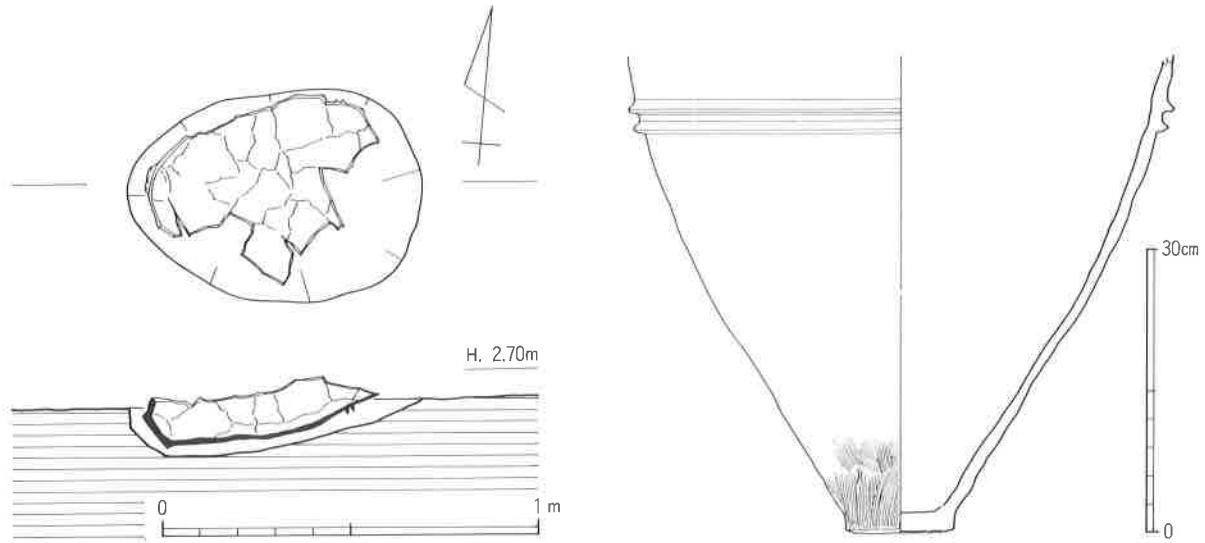
専用棺であり、胴部上半部を欠損する。胴部に2条の断面三角凸帯が巡り、底径は11.8cmに復元される。器面調整は全体的にナデ仕上げされるが、底部付近の外面にはハケ目が残されたままである。胎土には小砂粒を含み、器表の色調は外面暗赤褐色、内面白灰色を呈し、底部とその周辺には黒斑がみられる。

(棺内出土遺物)

打製石鏃一点が出土した。材質は黒曜石であり、長さ2.4cm、復元幅1.6cm、厚さ0.34cm、重さ0.8gを測り、基部の片側は欠損する。腹面の基部右端部に斜めに主要剥離面があり、刃部、基部ともに緻密な2次加工が施される。被葬者の体内に残されていたものだと思われるが、武器として使用されたかについては疑問が残り、副葬品である可能性も歪めないと考える。



第16図 73号甕棺墓棺内出土遺物実測図（縮尺1/1）



第17図 73号葬棺墓実測図（縮尺1/20）

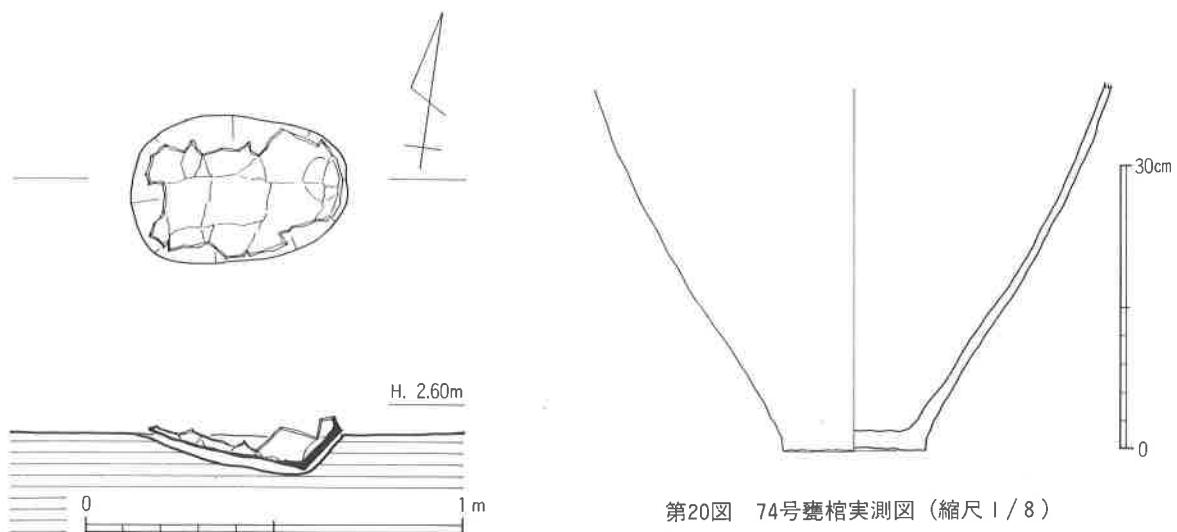
第18図 73号葬棺実測図（縮尺1/8）

74号葬棺墓

調査区の中央部南よりに位置する成人棺である。残存墓壙は長径57cm、短径40cmの橢円形状を呈し、下葬と思われる専用棺が残される。主軸方向はN-82°-Eを示し、約39°の傾斜角度をもって埋置される。棺体の内面全体に黒色顔料が塗布されており、特殊性をもった被葬者が埋葬されていたものとも思われるが、副葬品その他の遺物は検出されなかった。

(74号葬棺)

大型の専用棺である。胴部の上半部を欠損し、底部周辺と胴部の下半部の一部が残されるのみであるが、底径は15.0cmを測る。これは中期の葬棺としては、特に大きな部類に入るものである。また、内面の器表には黒色顔料が塗布されている。胎土には小砂粒を少量含み、外面の色調は燈褐色を呈する。



第19図 74号葬棺墓実測図（縮尺1/20）

第20図 74号葬棺実測図（縮尺1/8）

75号甕棺墓

調査区の南西部、墓群の最も西に位置する成人棺である。残存する墓壙は長径102cm、短径53cmの楕円形を呈し、下甕と思われる専用棺が水平に近い傾斜角度をもって埋置される。主軸方向はN-89°-Wを示す。

(75号甕棺)

大型の専用棺であり、口縁部周辺を欠損する。胴部に2条の断面三角凸帯が巡り、胴部は僅かに内傾しながら垂直的に立ち上がる。底部は墓壙内に散在する破片とともに検出され、元位置を保っていなかったが、残存する棺体とは完全に接合することができ、径13.0cmに復元される。器面調整は全体的にナデ仕上げされるが、底部付近の外面にはハケ目が残されたままである。胎土には小砂粒が少量含まれ、器表の色調は外面淡橙灰褐色、内面白灰色を呈する。また、胴部凸帯から底部付近にかけて縦長の黒斑がみられる。

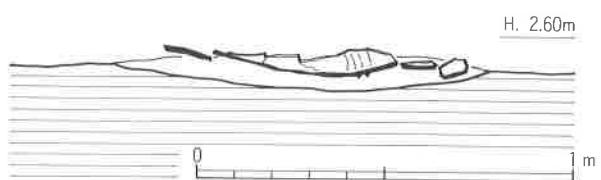
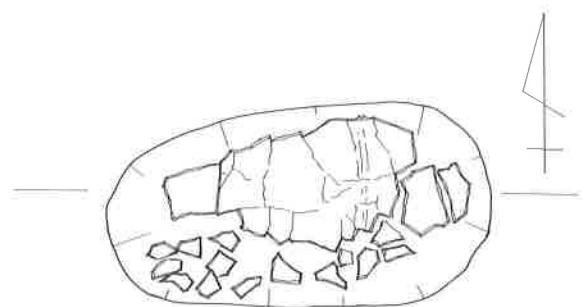
76号甕棺墓

調査区の南東部、墓群全体の最南端部に位置する成人棺である。残存する墓壙は長径78cm、短径50cmの楕円形状を呈し、下甕と思われる専用棺が埋置される。主軸方向はS-22°-Wを示し、底部周辺の残存状況から判断すると、約33°の傾斜角度をもって埋置されたものと思われる。

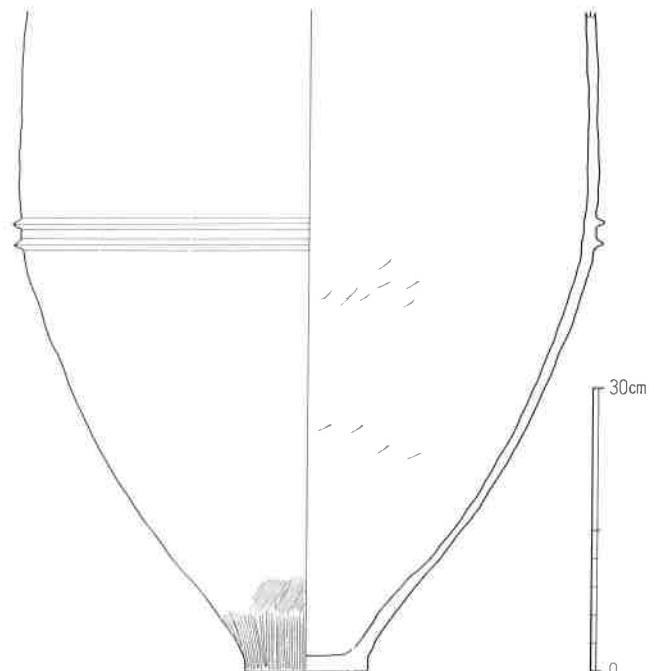
(76号甕棺)

大型の専用棺である。胴部の上半部を欠損し、胴部の断面三角凸帯は2条巡っていたものと思われるが下側の1条しか残っていない。残存する部分が少ないためにやや不正確な数値になっている可能性は否めないものの、胴部凸帯部は径78.0cm、底部は径14.0cmに復元され、墓群全体の中では最も大きな甕棺のひとつである。

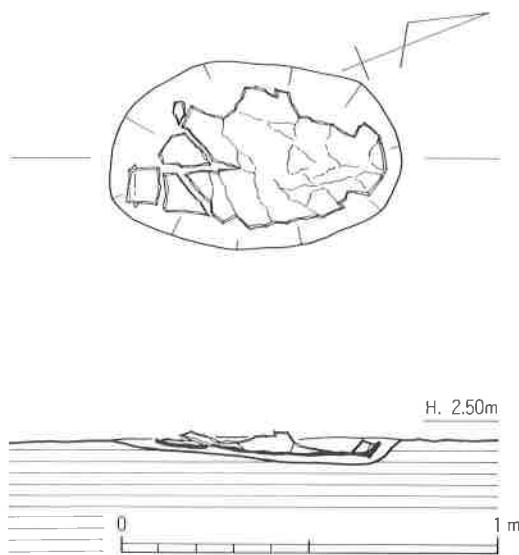
器面調整は全体的にナデ仕上げされ、ハケ目は殆ど残されていない。胎土には小砂粒を含み、焼成はややあまく軟質である。器面の色調は、外面は全体的に暗褐色を呈するものの部分的に暗燈褐色を呈する箇所があり、内面は全体的に燈褐色を呈する。



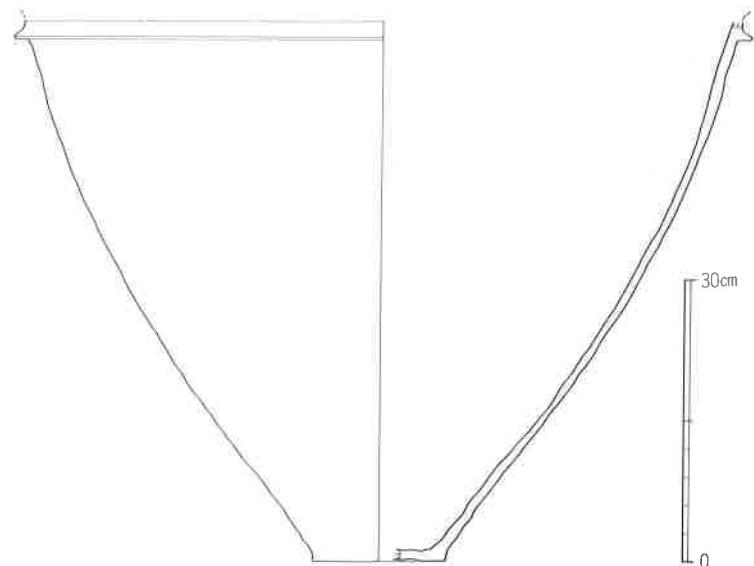
第21図 75号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第22図 75号甕棺実測図（縮尺1/8）



第23図 76号玉棺墓実測図（縮尺1/20）



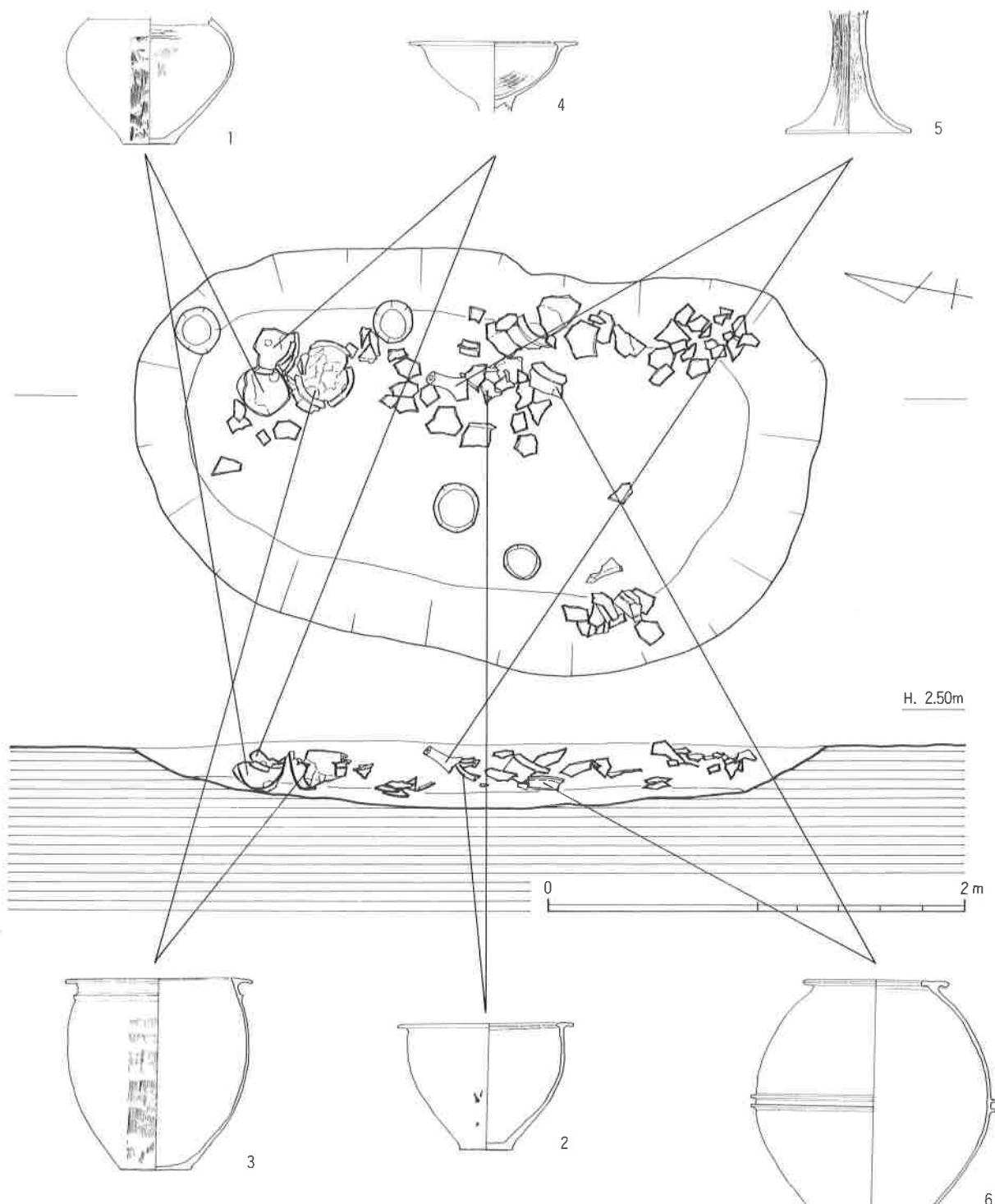
第24図 76号玉棺実測図（縮尺1/8）

表3 木舟・三本松遺跡玉棺墓一覧表

	主軸方位	傾斜角	出土遺物		主軸方位	傾斜角	出土遺物		主軸方位	傾斜角	出土遺物
1	S-10°-E	ほぼ水平		24	N-44°-E	44°		49	N-90°-W	5°	
2	N-14°-W	ほぼ水平		25	S-86°-E	—		50	S-9°-E	9°	
3	S-80°-W	45°		26	N-66°-E	26°		51	S-88°-W	34°	
4	S-7°-E	ほぼ水平		27	N-72°-E	—		52	N-77°-E	—	
5	S-73°-W	37°		28	N-81°-E	ほぼ水平		54	N-45°-W	—	
6	S-85°-W	15°		29	N-35°-E	ほぼ水平		59	N-89°-E	ほぼ水平	
7	S-25°-E	26°		30	N-67°-E	ほぼ水平		60	N-73°-E	36°	
8	S-69°-W	43°		31	N-8°-W	22°		61	N-41°-W	ほぼ水平	碧玉製管玉2
9	N-55°-W	37°		32	N-83°-E	48°	碧玉製管玉3	62	—	—	
10	N-10°-E	ほぼ水平		33	N-90°-E	35°	碧玉製管玉1	63	N-28°-E	30°	
11	N-20°-E	ほぼ水平	磨製石鎌1、磨製石剣切先1	34	S-22°-E	64°		64	N-19°-E	ほぼ水平	
12	N-75°-E	43°	碧玉製管玉1	35	S-50°-W	32°	碧玉製管玉2	65	S-67°-E	ほぼ水平	
13	S-64°-E	40°		37	S-76°-W	27°	磨製石剣1	66	N-73°-E	ほぼ水平	
14	N-76°-E	22°		38	N-35°-E	34°		67	N-87°-W	ほぼ水平	碧玉製管玉2
15	S-82°-W	24°		39	S-61°-E	ほぼ水平		68	N-72°-W	ほぼ水平	碧玉製管玉19
16	N-83°-W	—		40	N-75°-E	30°		69	S-10°-W	ほぼ水平	
17	S-79°-W	43°		41	N-86°-W	ほぼ水平		70	S-85°-E	ほぼ水平	
18	N-48°-W	65°		42	S-87°-E	10°	碧玉製管玉3	71	S-84°-E	ほぼ水平	
19	N-76°-W	—		43	S-71°-E	—	硬玉製勾玉1	72	S-78°-E	ほぼ水平	
20	N-75°-W	10°		44	N-86°-W	33°	碧玉製管玉8	73	N-85°-E	ほぼ水平	打製石鎌1
21	N-75°-W	ほぼ水平		45	N-7°-E	42°		74	N-82°-E	39°	
22	S-87°-E	ほぼ水平		46	S-73°-E	ほぼ水平		75	N-89°-W	ほぼ水平	
23	N-80°-E	ほぼ水平		48	S-66°-W	50°		76	S-22°-W	33°	

SK-01

調査区の北東部、K-69, 70, 71に近接する位置にある土壙である。長径3.3m、短径1.9m、深さ0.3mの橢円形を呈し、主軸は磁北方向にはば一致している。遺物は東半分に集中して出土し、時期的には全て、中期後半の範疇で捉えられるものである。



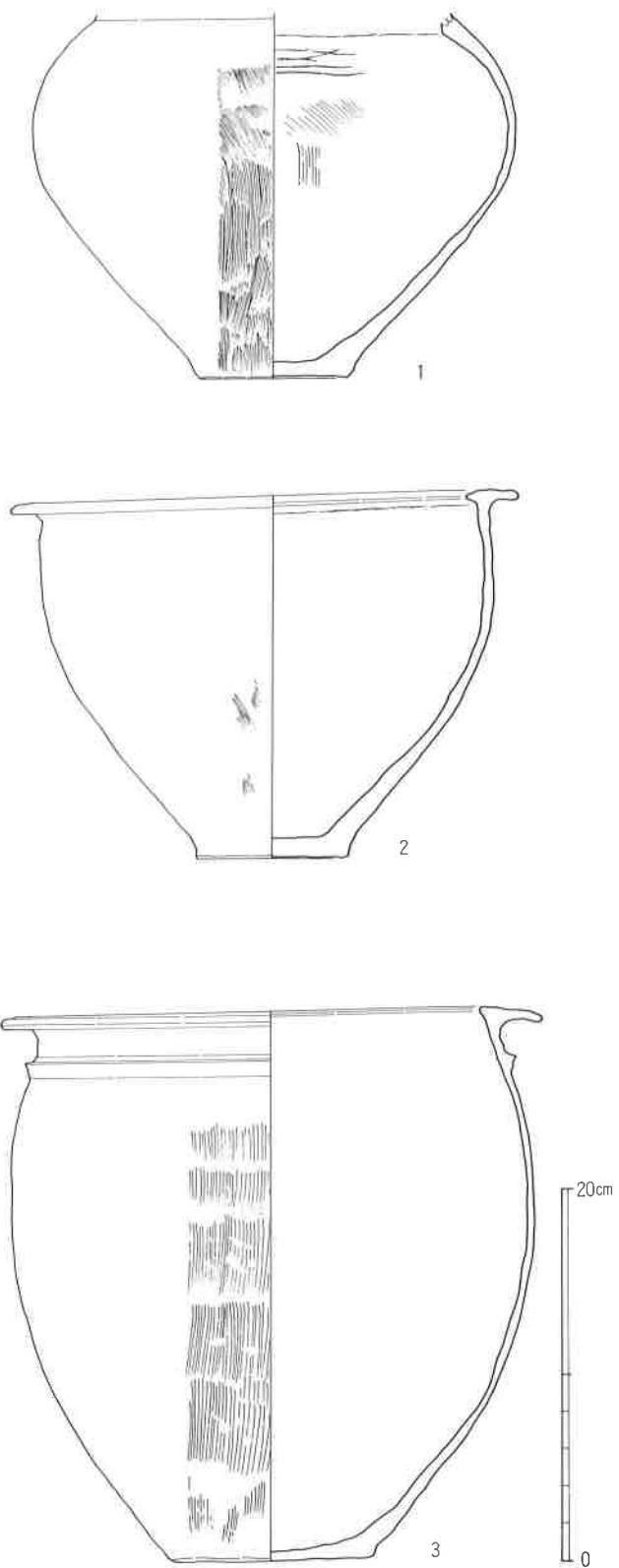
第25図 SK-01実測図 (縮尺 1/30)

(出土遺物)

1は、頸部より上位と胴部の2／3を打ち欠かれた壺形土器である。器表には赤色顔料が付着しているがその付着部分は割れ口にまで及び、塗布されていたものではなく隣接して出土した高杯のものが流れだし、付着したものだと思われる。墓壙内とその周辺にはこの土器と同一個体である可能性をもつ破片はないので、後世の搅乱等により欠損したものではなく、出土した状態のままで廃棄されたものと考えられる。計測値は、胴部最大径25.8cm、底径8.0cmを測り、外面には全体的に目の細かいハケ目が縦方向を基本として残される。内面の器面調整は外面と異なった目の粗いハケ調整の後にナデ仕上げされ、頸部直下付近には横方向の工具痕が残される。胎土には小砂粒、雲母が僅かに含まれるが精練されており、器表の色調は内外面ともに淡燈褐色を呈し、底部全体とその周辺に黒斑がある。

2は、土壙の中心部東寄りから出土した鉢形土器である。破碎されたような状況で出土しており、現地作業段階においては接合し得るものとの認識はもっていなかった。口径は27.2cmに復元され、器高19.9cm、底径8.2cmを測る。器面調整は目の細かいハケ調整の後に丁寧なナデ仕上げが施されるが、部分的にハケ目が確認される。胎土には長石、石英等の小砂粒がやや多く含まれ、器表の色調は、内外面ともに淡燈褐色から灰褐色を呈し、口縁部直下に径5cm程度の黒斑がみられる。

3は、1の南側に隣接して出土した壺形土器であり、胴部の一部を欠損する。出土状況は上からの土圧によって潰されたような状況を呈していた。口径29.0cm、器高29.8cm、底径10.0cmを測り、口縁部直下に1条の断面三角凸帯が巡る。外面には縦方向のハケ目が残される。器表の色調は、内外面ともに淡燈白褐色を呈し、胎土は長石、石英粒を少量含むが精良であり、焼成は良好である。

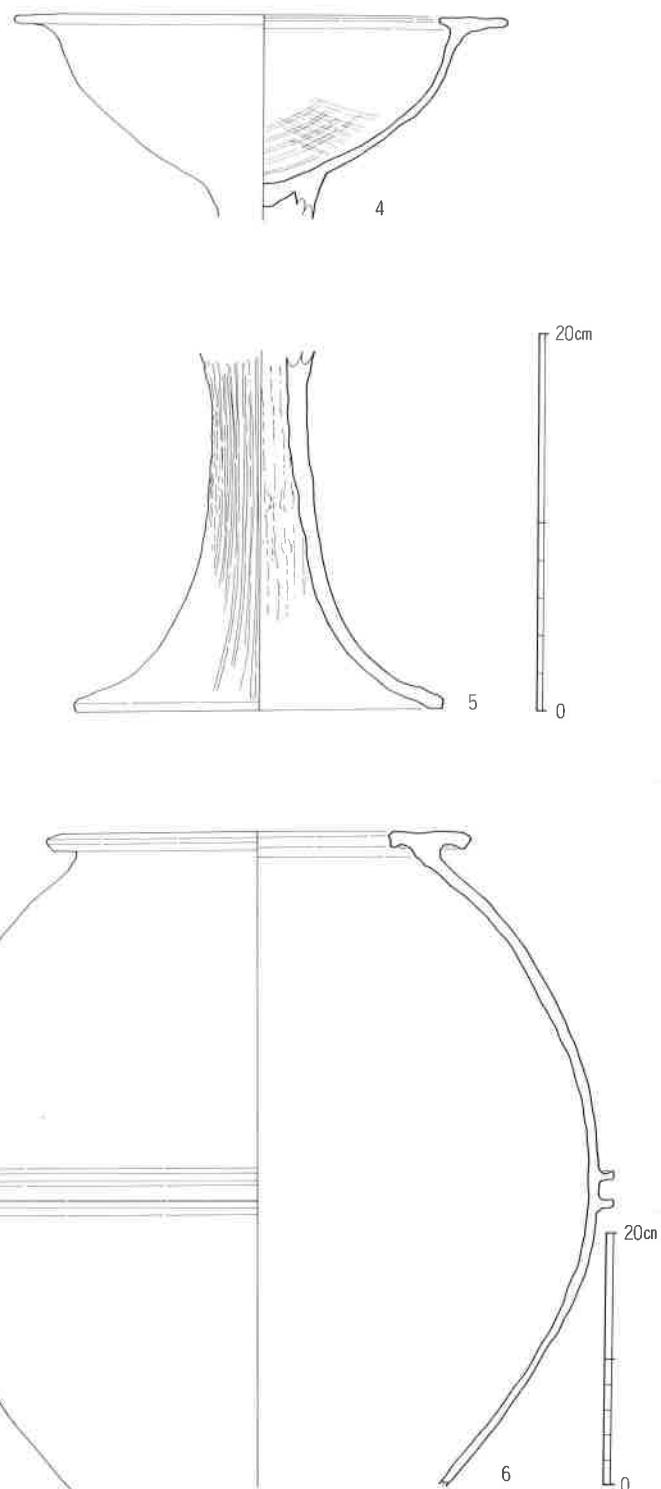


第26図 SK-01出土遺物実測図・1 (縮尺1/4)

4は、1と3の東側に隣接して出土した高杯である。口縁部の1/3程度と脚部を欠損する。5と同一個体である可能性も否定できないが、やや無理があるものと考える。口径は26.7cmを測り、口縁部の上端から内面の全体にかけて赤色顔料が塗布される。外面にもその痕跡は確認されるが、赤色顔料の付着する部分が点状、或いは線状を呈する部分もあり、器表が摩耗している点も併せて、全体的に塗布されていたかどうかについては疑問が残る。また、内面には暗紋状のミガキが横方向に4分割して施されている。器表の色調は、赤色顔料の剥落している部分では内外面ともに白褐色を呈し、胎土には石英粒が僅かに含まれ、器質は軟質である。

5は土壙の中央部東寄りから出土した高杯の脚部である。底径19.4cmを測り、残存高は18.9cmを測る。土壙の床面から20cm程度浮いた状態で出土した。外面には縦方向のミガキが施され、赤色顔料が塗布される。胎土には長石、石英等の小砂粒を含み、器表の色調は内外面ともに淡橙褐色を呈する。

6は土壙の東南部から出土した甕棺である。口縁部から胴部にかけての1/3を欠損する。口径34.0cmを測り、胴部は球形状を呈し、口縁部は小さく窄まる。胴部最大径位には2条の断面コ字形凸帯が巡る。器面調整は丁寧にナデ仕上げされ、胎土には小砂粒を少量含み、器表の色調は内外面ともに淡橙褐色を呈する。また外面の凸帯部直上に縦10cm、横25cm以上の横長の黒斑がみられ、同じ位置の凸帯部直下には縦25cm以上、横15cm以上の黒斑がみられる。



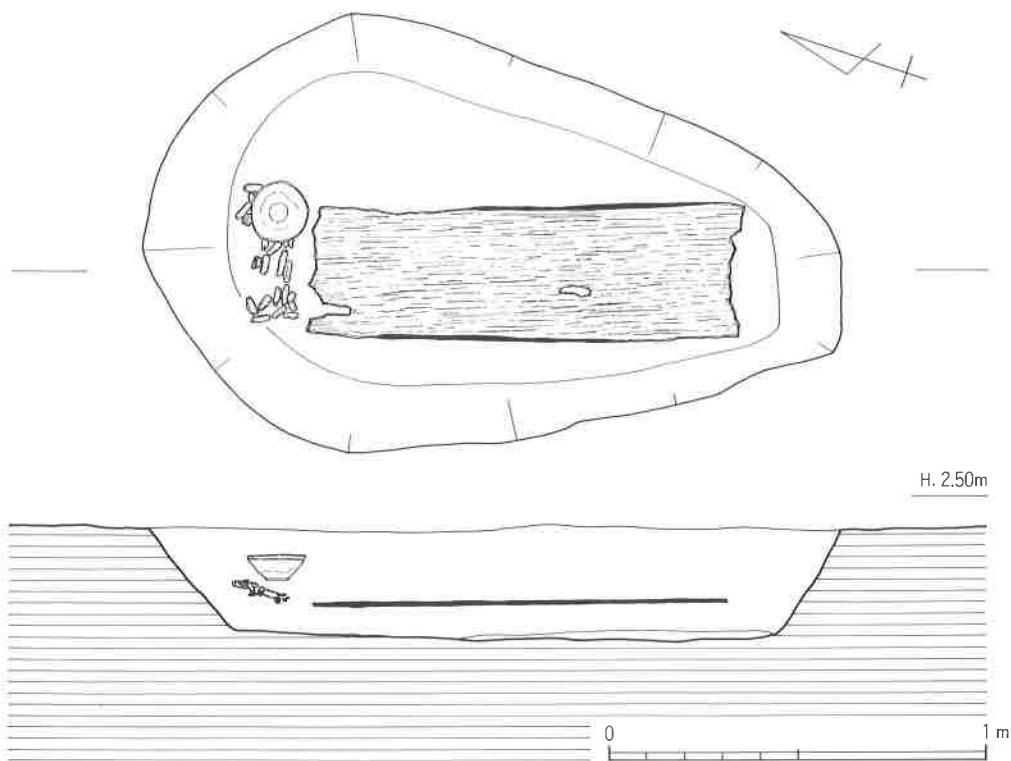
第27図 SK-01出土遺物実測図・2 (縮尺1/4, 1/6)

3. 歴史時代の遺構と遺物

a. 木棺墓

ST-01

調査区の北東部付近で検出された平安時代後期（11世紀後半～12世紀初頭）の木棺墓である。周辺には同時期の柱穴が多數確認され、一般的な墓域とは考えにくい場所に単独で存在しており、被葬者の特殊性が窺える。木棺墓の墓壙は、長径185cm、短径116cm、深さ約30cmを測る不整橢円形状を呈し、床面から10cm程度浮いた状態で7～8mm程度の厚みをもつ長さ115cm、幅35cmの棺材の底板が残されていた。側板と思われる材が底板を挟み込む状態で部分的に確認されたが釘等の接合材は検出されず、棺材にもその痕跡は確認できなかった。底板の主軸方向はN-19°-Wを示し、頭部付近からは白磁碗1点と、土錘17点、石錘6点の計23点の錘が出土した。副葬品と考えられるこれらの遺物は底板からはみ出た位置で出土おり、またその上位からは人間の歯と思われる碎片が検出されている。これらの碎片は出土状態のままで取り上げる事ができなかったが、検出段階においては顎のラインを示すようにU字状を呈していた。錘はその出土状況から紐状のもので繋がっていたものと考えられるが、或いは箱状のものに入れられていた可能性もある。棺材の検出状況は底板の長さがこれ以上にわたっていたとは考えにくいものではあったが、これらの状況から判断して棺の長さは130cm程度あったものと推定され、副葬品は棺上、もしくは被葬者の頸部から胸部にかけて置かれおり、土圧によって小口板が外側に倒れた際に若干の頭部の移動があったものと思われる。また、埋土の表層からは管玉1点が出土しているが、この管玉は近接する破壊された甕棺墓に副葬されていたものであろう。



第28図 ST-01（木棺墓）実測図（縮尺1/20）

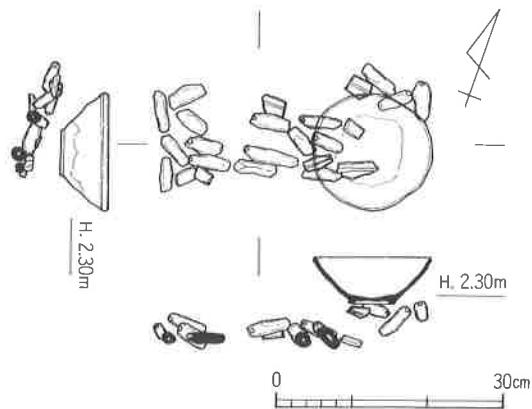
(出土遺物)

1は白磁碗IV類であり、口径15.7cm、底径6.1cm、器高6.4cmを測る。ほぼ完全な形を保っているが、口縁部には長さ2cmの焼成段階に生じたものとみられる縦方向の亀裂が入り、歪みがある。典型的なIV類のものよりも玉縁口縁部の膨らみが小さく、外面の体部上半はヘラ削りが施され、その部分に重なるように透明感の高い釉が掛けられる。また、ヘラ削りが施されない部分にはハケ状の工具痕が残る。内面には沈線や段ではなく滑らかな曲線を呈し、体部中位付近に釉溜まりがみられ、施釉部分には全体的に無数の貫入が入る。胎土は白灰色を呈し、焼成は磁器としてはややあまいように感じられ、外底の中心部と、高台の内側は部分的にかいらぎ状を呈している。口縁端部には焼成後の欠けが多くみられ、被葬者が日常的に使用していた愛用品を副葬したものだと思われる。

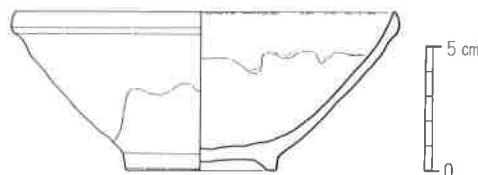
2～18は土錘であり、長さ4.8～6.5cm、径1.9～2.5cm、重さ17.6～26.8gを測る。平均値は長さ5.6cm、径2.2cm、重さ21.7gを測り、長さと径の比から大別して2類に分類される。I類は短小で長さに比して径の大きなもので2～8がこれに属し、II類は細長くて長さに比して径の小

表4 ST-01(木棺墓)出土土錘計測表

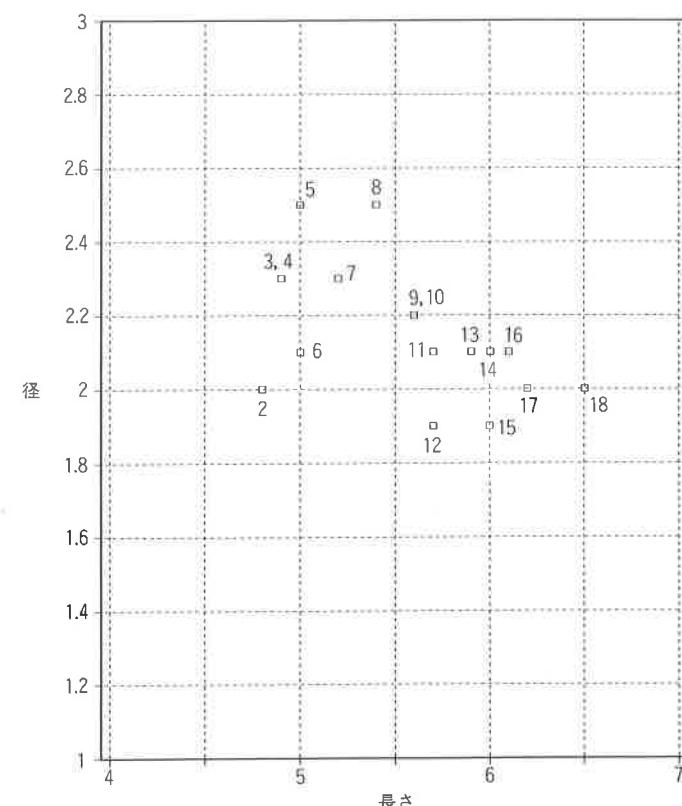
	長(最大) 単位:cm	径(最大) 単位:cm	重量 単位:g	体積 単位:cm ³	色調
2	4.8	2.0	19.0	11	淡橙褐色
3	4.9	2.3	20.8	12	白灰褐色
4	4.9	2.3	21.5	13	灰褐色
5	5.0	2.5	23.8	14	暗灰褐色～暗灰黒色
6	5.0	2.1	18.8	11	明灰黒色～暗灰褐色
7	5.2	2.3	25.1	14	灰褐色
8	5.4	2.5	26.8	15	淡橙褐色
9	5.6	2.2	22.7	13	灰褐色
10	5.6	2.2	22.4	12	淡橙褐色
11	5.7	2.1	22.4	12	白褐色
12	5.7	1.9	17.6	10	暗灰褐色
13	5.9	2.1	19.0	11	灰褐色
14	6.0	2.1	23.2	13	淡橙褐色
15	6.0	1.9	19.7	11	暗灰褐色
16	6.1	2.1	23.7	13	暗褐色
17	6.2	2.0	21.9	13	淡橙褐色
18	6.5	2.0	20.8	12	淡橙灰褐色

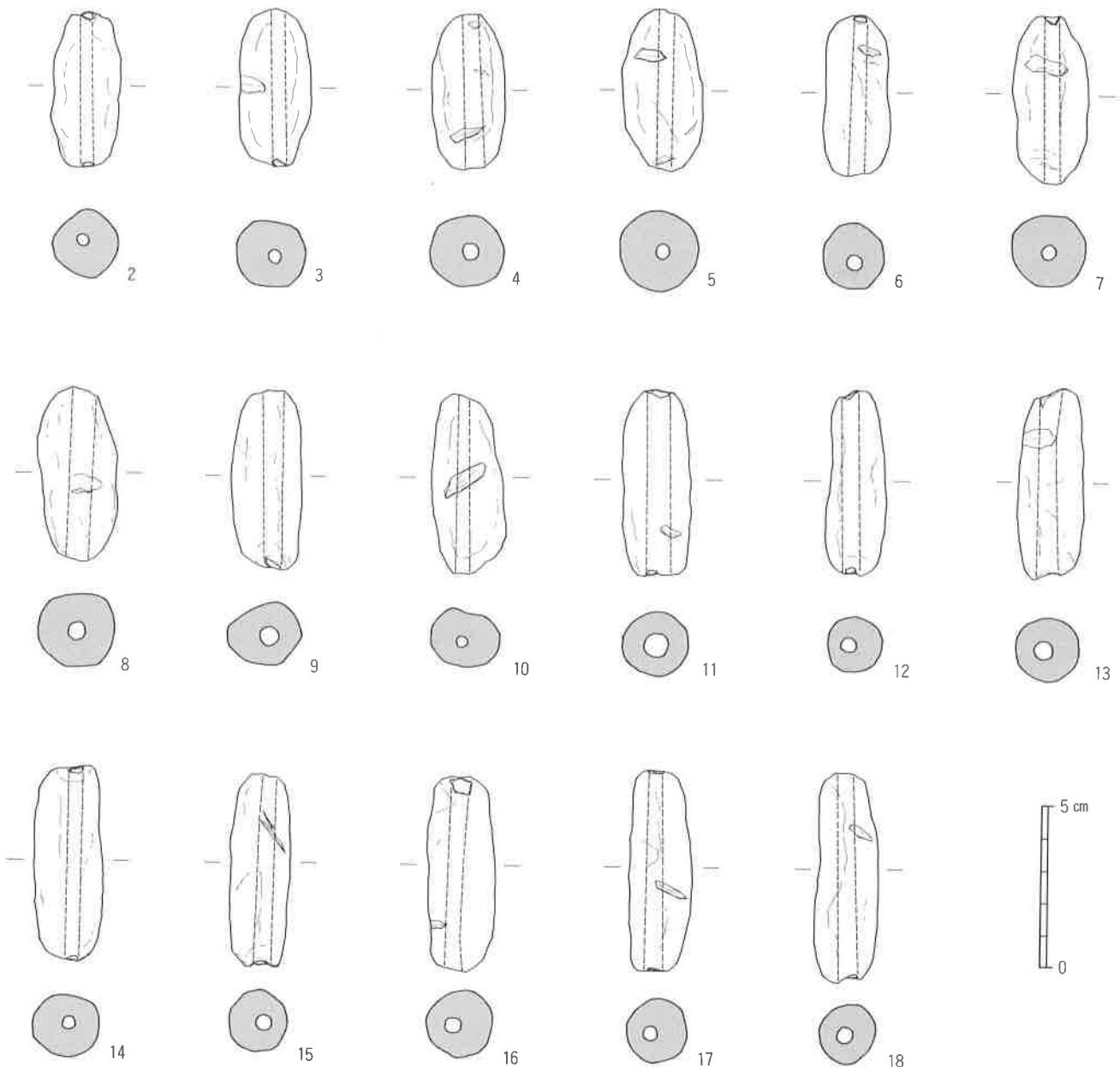


第29図 ST-01遺物出土状況(縮尺1/10)



第30図 ST-01出土白磁実測図(縮尺1/3)





第31図 ST-01出土土錘実測図（縮尺1/2）

なもので、9～18がこれに属す。また、外面には焼成前に生じた棒状、或いは紐状のものによる窪み状の擦痕があるものが多く、製作段階の何らかの痕跡を示しているものであると思われる。

19～24は滑石製の石錘である。全て石鍋の再加工品であると思われ、相対する2面に一对の切り込みがあるタイプである。また、石鍋製作時による1次加工痕、石錘の整形段階による2次加工痕の方向は、切り込みの部分を除き、切り込みの方向に対して直角に施されている。

19は平面形は長方形状を呈し、断面は扁平である。切り込みの入らない面の片面は石鍋の器表をそのまま利用したものであり、1次加工時の工具痕が残り、煤が付着している。また、端面には殆ど整形が施されておらず、層状になった滑石の地肌が露呈している。

20は平面径は長方形状、断面形は正方形状を呈する。切り込みの入らない面の両面に1次加工時の工具痕が残り、煤が付着する。端部の片面は切削面を滑らかに整形しているが、もう片面には施されておらず、両側から小さな切り込みを入れて折るという擦切技法が用いられてる。

21は平面形は台形状、断面形は長方形状を呈し、切り込みの入る面の片面のみに1次加工時の工具痕が残り煤が付着し、石錐の器面屈曲のなごりが残る。

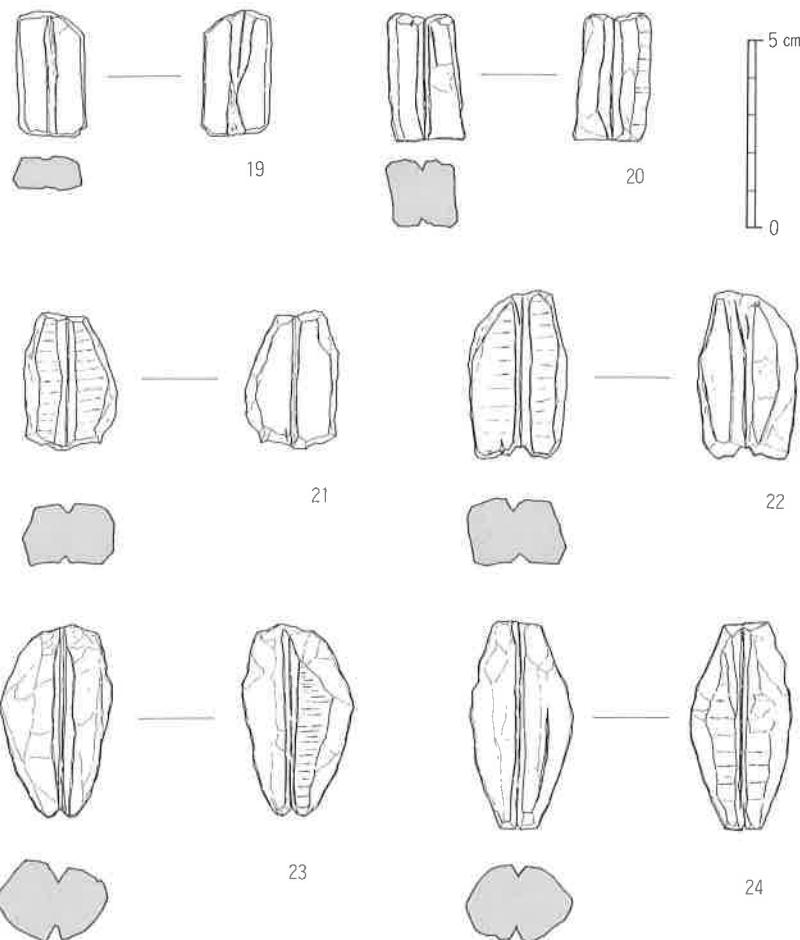
22は、21と同じタイプのものである。切り込みの入る面の片面のみに1次加工時の工具痕が残り、煤が付着する。

23は一次加工時の工具痕、石錐の使用痕を全く残さないものである。断面形は橢円形状を呈し、全体的に曲面を意識して2次加工が加えられており、部分的に研磨が施されているが、工具痕の深さまでには達していない。

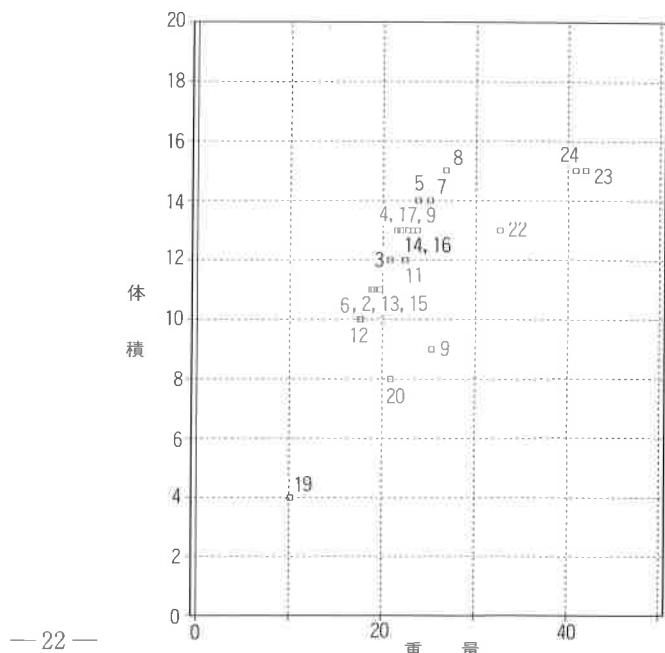
24は、23と同じタイプのものであり、端面は鋭利に切削される。

表5 ST-01(木棺墓)出土石錐計測表

	長(最大) 単位:cm	幅(最大) 単位:cm	厚(最大) 単位:cm	重量 単位:g	体積 単位:cm ³
19	3.3	1.8	0.9	10.1	4
20	3.4	1.9	1.8	20.9	8
21	3.7	2.4	1.6	25.3	9
22	4.4	2.6	1.8	32.6	13
23	5.1	3.0	2.1	41.9	15
24	5.5	2.7	2.0	40.8	15



第32図 ST-01出土石錐実測図 (縮尺1/2)



b. 溝状遺構

SD-01

調査区中央部南寄りに位置する溝状遺構である。主軸方向はN-77°-Wを示し、長さ30m、最大幅4.5m、深さ0.3~0.5mを測り、西端部付近で大きく二股に分かれ、整った形態をもたない。いくつかの遺構と切り合っており、異なる時期の遺構を誤って同時に掘ってしまった部分もあるかと思われる。SD-02とともに区画溝的な意味合いをもつものだと思われ、東部、南部の緩斜面とともに東西36m×南北40mの区画域を形成するものである。遺構の時期は、11世紀後半から12世紀初頭であると考えられる。

SD-01出土遺物

遺物は甕棺、土師器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、滑石製品などがあり、パンケース50箱程度の出土があったが、殆どが細片であり図示できるものは僅かであった。ここでは遺構の存続期間を示す遺物のみを図示する。

(土師器)

1~6は東端部付近から出土した小皿であり、底部の切り離し方法は全てヘラ切りである。計測値は口径10.3~10.9cm、底径6.1~7.0cm、器高1.4~2.2cmを測り、平均値は口径10.6cm、底径6.5cm、器高1.7cmである。

7は丸底杯であり、底部押し出し技法によるものである。口径15.3cm、器高3.4cmを測る。

8は小椀であり、口径12.4cm、高台径6.0cm、器高4.3~4.7cmを測り、低く安定した高台が付される。また2次的に火を受けた痕跡があり、器表は全体的に焼け焦げている。

9は口径15.2cm、高台径6.9cm、器高4.2cmに復元される椀であり、底部の整形には押し出し技法が用いられる。高台は低く丸みをもち、瓦器的な形態を呈する。器表の色調は内外面ともに淡燈褐色を呈し、内底には円形に変色した重ね焼きの痕跡が確認される。

(黒色土器)

10は内面のみ黒く燻される黒色土器A類の椀であり、高台径7.4cmを測る。内面のカーボンの吸着は良好であり、4分割されて研磨が施される。外面は摩耗されており研磨の有無は確認できない。

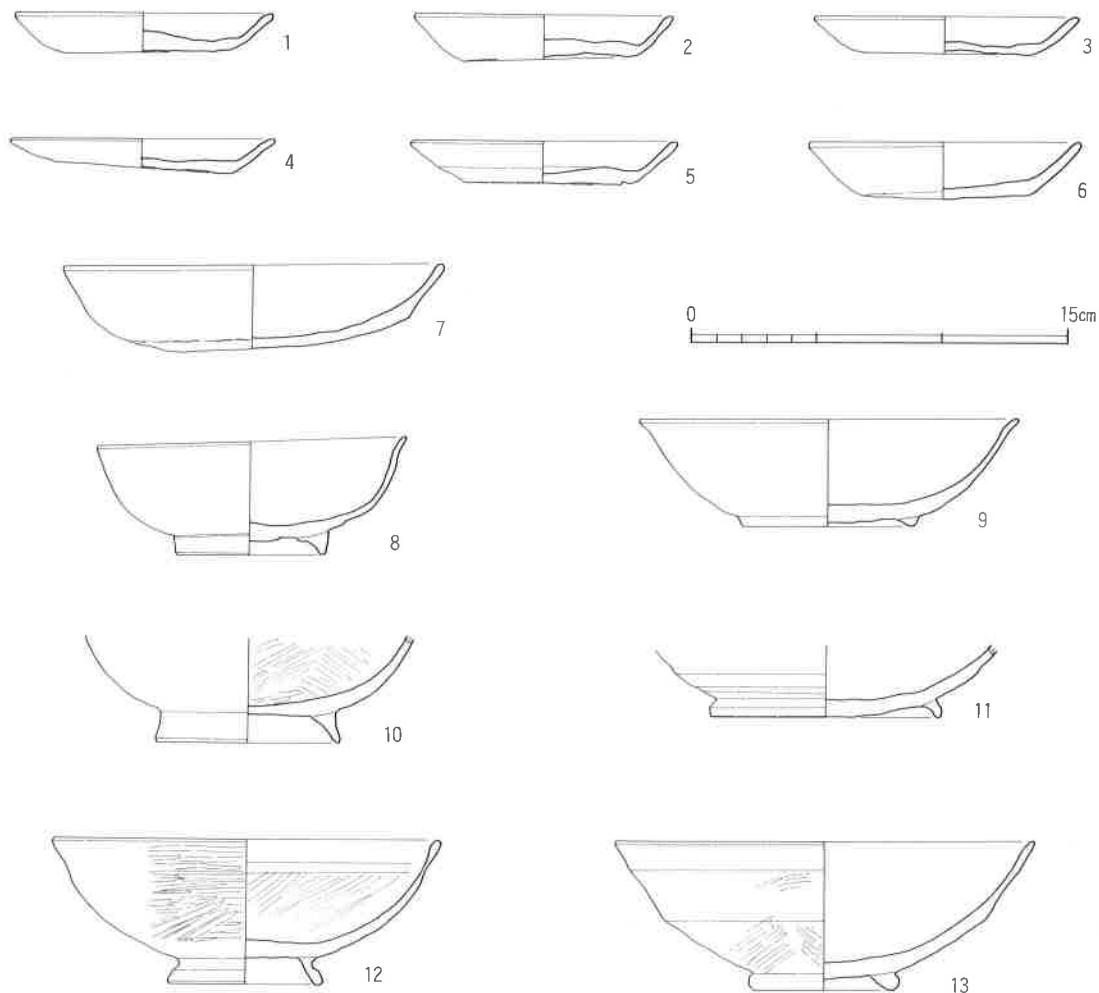
11は黒色土器B類の椀であり、器表の内外面が黒く燻され、カーボンの吸着は内外面ともに良好である。器壁内面は暗灰色を呈する。高台は低く細く、外側に向かって斜めに付され、径は9.2cmを測る。

12も黒色土器B類の椀であり、口径15.5cm、高台径6.2cm、器高5.8cmを測る。体部は口縁部下で屈曲点をもち、口縁部は膨らみをもってまるくおさめられる。内面の口縁部下には、幅広の籠状工具により沈線を意識したかのような段が生じている。外面には研磨による器面調整が、外面は横、又は斜め方向に、内面は一方向に密に施され、カーボンの吸着は内外面ともに良好であり、器壁内面は灰褐色を呈する。

(瓦器)

13は糸島地方における瓦器椀の初現的形態を示すものと思われ、12の黒色土器B類との繋がりが推察される。口径は16.8cmに復元され、高台径6.0cm、器高5.9cmを測る。体部中位に屈曲

点をもち、口縁部は外側に大きく広がる。外面の色調は白灰色を呈するが、黒斑状に黒色化する部分もある。内面は淡黄灰色を呈し、滑らかに仕上げられる。器壁内面は、中心部は黒色を呈するが、器表側は淡黄灰色を呈する。研磨は外面のみに粗く施されている。



第33図 S D-01出土遺物実測図・I (縮尺1/3)
(白磁)

1から23は碗である。

1は碗IV類であり、口径16.8cm、高台径8.2cmに復元され、器高は6.1cmを測る。乳白色を呈する釉が高台部を除いた全体に掛けられ、外面には気泡が多くみられる。

2は碗IV類に分類され、高台径は7.2cmを測る。胎土は白色を呈し、やや青色味を帯びた透明度の高い釉が高台際まで掛けられる。

3、4は高台部の形状からは碗IV類に分類される。やや緑色味を帯びた透明度の高い釉が内面の全体と外面の上半に掛けられ、気泡は殆どみられない。3の高台径は6.3cm、4は5.9cmを測る。

5は高台周辺部のみの残存であるが、低く直立した高台の形状、内底見込みに太い沈線状の段があることから、碗VII類に属するものと思われる。釉調は僅かに緑色味を帯びた白濁色を呈し、細かい貫入が全体的にみられる。高台径は6.0cmを測り、胎土は灰白色を呈するが、露呈部

は燈色味を帶びる。

6は高台径6.0cmを測り、透明感のない白濁色の釉が高台際まで掛けられる。内面には降り込みがみられ、縦方向の貫入が入る。

7は高台径6.5cmに復元される。白濁色の釉が高台際まで掛けられ、内面見込みには沈線が入り、段状を呈する。また外面には、縦方向の調整痕が残される。

8, 9は細く屹立した高台を有し、椀V類に分類される。

8は高台径6.1cmを測り、淡褐色を呈する釉が薄く掛けられ、胎土には鉄分を多く含み無数の貫入が入る。また内底見込み部には段状の沈線が入る。

10~23は口縁部のみの残存である。10~28は椀II類、16~20は椀IV類、22, 23は椀V類に分類されるが、II類とIX類との分離が困難であり、12は他のII類と比較して丁寧に作られ、釉は僅かに青緑色みを帶びており、IX類とすべきかとも思われる。21は不明である。

24~28は皿である。

24は底径4.0cmを測り、内底見込みに沈線が入る。釉は僅かに緑色味を帶びる。

25の底部は僅かに側面を有し、底径4.7cmを測る。釉は白濁色を呈し、無数の貫入が入る。

26はII類であり、底部を小さく高台状に削り出したものであり、底径5.0cmを測る。

27は低い逆台形状の底部を有し、皿II類に分類される。高台径4.2cmに復元され、透明感の無い白濁色の釉が高台際にまで施釉される。

28は鴻臚館跡SK-01に類似する形態をもつもの（山崎分類 皿I-2b）があり、IX類に共伴するものであると思われる。口径12.6cm、器高3.1cmを測り、高台径6.5cmに復元される。体部は高台部から緩やかに広がり、屈曲点をもって急激に立ち上がり、口縁部は垂れ気味に外側に折り返される。やや青みを帶びた白濁色の釉が高台と体部との接合部付近まで掛けられ、高台の側面にまで及ぶ部分もみられる。胎土は白色を呈し、器表には無数の貫入が入る。

29は水差の注口部であり、先端部を欠損する。釉はやや緑色味をあびた乳白色を呈する。

(青磁)

1~4は越州窯系青磁である。

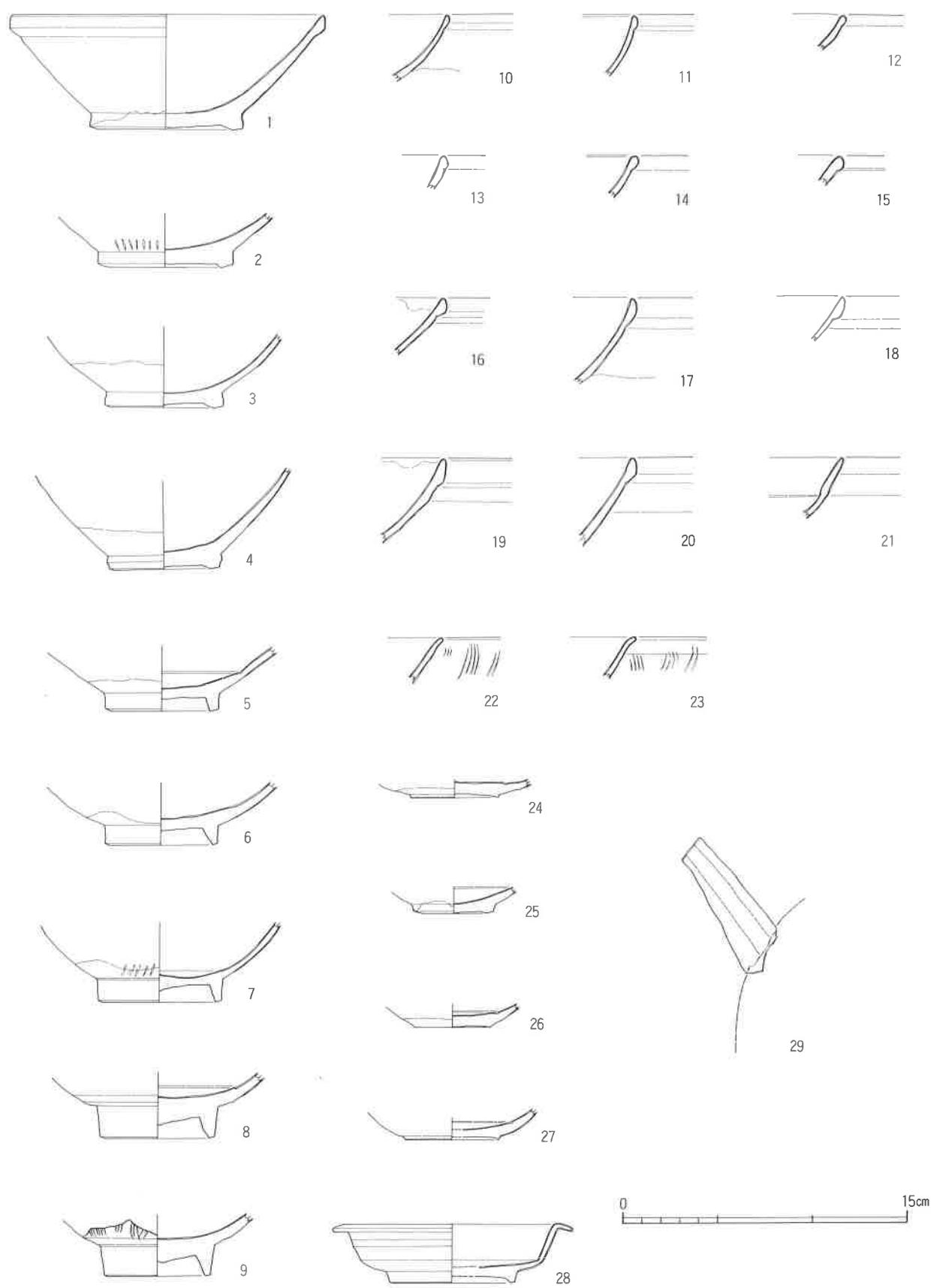
1は口径16.6cmに復元される椀、或いは鉢の口縁部である。釉は薄緑色を呈し、胎土は白灰色を呈する。

2は径8.4cmに復元される鉢の高台部であり、輪状高台を呈する。釉は薄黄緑色を呈し、高台底部以外の全体に掛けられる。また、内面見込み部と高台底部には重ね焼きによる目跡が残される。胎土は、やや青みがかった灰色を呈する。

3は小片であるが壺の口縁部にあたるものだと思われ、口径9.3cmに復元される。釉は暗黄緑色を呈し、胎土は暗赤褐色を呈する。

4は椀の高台部周辺であり、径7.0cmに復元される。内面見込み部には沈線が巡り、やや丸みのある輪状高台が付される。釉は薄緑色を呈し、高台底部の一部を除いた全体に掛けられる。重ね焼きによる目跡は内面見込み部と高台疊付部にみられ、それぞれ4ヶ所程度あったものと思われる。胎土は灰色を呈するが、外底部と高台部内側側面部は燈褐色を呈する。

5, 6は高麗系青磁である。



第34図 SD-01出土遺物実測図・2 (縮尺1/3)

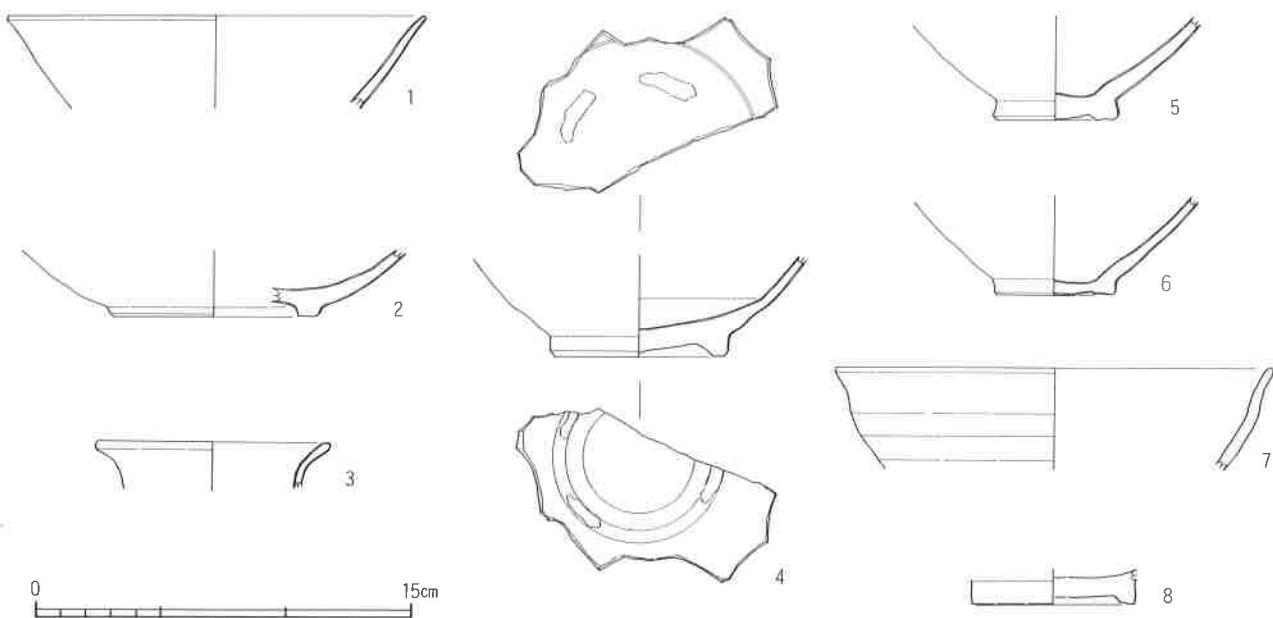
5は椀であり、高台は幅が広く低い輪を呈し、径5.0cmに復元される。釉はくすんだ青緑色を呈し、高台側面には釉溜まりがみられる。外面には気泡が目立つもの、内面には目跡は残されておらず、精製品の部類に入るものと思われる。貫入は内外面ともに観察され、胎土には微小砂粒を少量含むが精練されており、体部付近は灰色を呈し、高台部付近は燈褐色を呈する。

6は器形的には1と同類であるが、全体的にそれよりも器壁が薄く、釉の発色が良好であり透明感のある明青緑色を呈する。高台径は5.0cmに復元され、釉は体部から外底に至る全体に掛けられる。高台底部と外底には部分的に釉がはがれ露呈している部分があるが規則性はみられず、意識的なものかの判断はしかねる。胎土は精練されており、明灰色を呈する。

(緑釉陶器)

7は椀、又は鉢の口縁部であり、口径17.6cmに復元される。胎土は灰色を呈し、焼成は良好で須恵質である。釉は暗緑色を呈し内外面に刷毛塗りされるが、釉の器面に対する定着が悪く、特に外面には露呈部分が多く見られる。

8は椀の高台部である。片薄の輪状高台を呈し、径は6.4cmに復元される。胎土、焼成は須恵質であり、器壁中心部付近は暗燈褐色を呈する。釉は暗緑色を呈し、高台部外側面まで刷毛塗りされ、部分的に畳付け部内側にもみられる。



第35図 SD-01出土遺物実測図・3 (縮尺1/3)

(陶器)

1は高麗系無釉陶器の口縁部である。口縁部は複合口縁状を呈し、径は12.6cmに復元され、頸部には小さな凸帯が削り出される。胎土は精練され砂粒などは殆ど含まず、須恵質に焼成され堅牢であり、器壁内面の色調は暗紫色を呈する。外面と口縁部内面には自然釉や降りかぶりがみられ、内面は強くクロコロ撫でされる。

2は3と類似した胎土の特徴もっており、高麗系無釉陶器であると思われる。口径は21.4cmに復元され、頸部と肩部の境目付近に1条の沈線が巡る。内外面ともにロクロ撫でによって器面調整が施される。

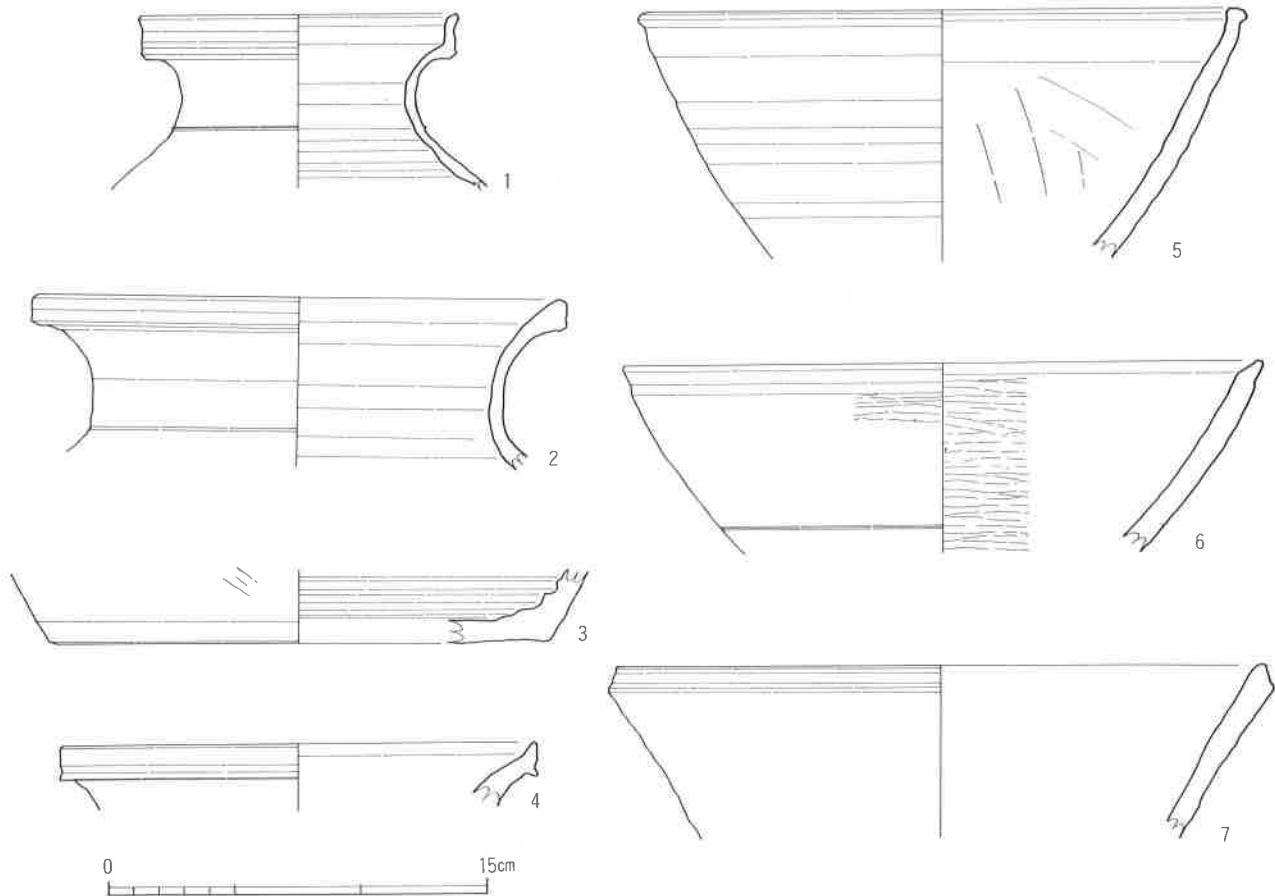
3は高麗系無釉陶器のものと思われる底部であり、径は19.8cmに復元される。胎土は燈褐色を呈し赤色小粒を少量含み、割れ口はあたかも粘板岩のように層状を成す。器表の色調は灰色を呈し、外面は叩きの後をナデ消し、内面はロクロ撫でされる。焼成は軟質である。

4は径21.0cmに復元される甕、又は鉢の口縁部である。器表の色調は暗紫色を呈し、器壁内面の色調は燈褐色を呈する。胎土には赤色、または白色粒を含み、焼成は堅牢であるが須恵質ではない。

5は須恵質の鉢であり、口径24.3cmに復元される。同型の鉢を俯せて重ね焼きしたものと思われ、外面の口縁部直下で色調が異なる。胎土は灰色を呈し、径2~3mm程度の石粒、及びに黒色の微小砂粒を少量含み、白色の微小砂粒を多量に含む。外面と、内面の口縁部付近はロクロ撫でされ、内面の体部は斜め方向にナデられる。

6は瓦質の鉢であり、口径25.5cmに復元される。体部中位には1条の鋭利な沈線が巡り、外面は不明瞭であるものの内外面ともに研磨が施され光沢がある。胎土は白灰色を呈し白色の微小砂粒が多く含まれ、径1~2mmの炭化物粒が僅かに含まれる。

7は軟質の鉢であり、口径26.4cmに復元される。6と焼成は異なるものの、胎土は類似する。



第36図 SD-01出土遺物実測図・4 (縮尺1/3)

(滑石製品)

1～5は錘である。

1は下半部を欠損するが、両端にくびれを有するものであると思われる。残存長3.9cm、最大幅1.7cm、最大厚1.1cm、重さ8.8gを測る。

2は中央部にくびれを有するものであり、長さ4.1cm、最大幅1.3cm、重さ11.1gを測り、断面形は台形状を呈する。

3は中心部に切り込みがあるもので円柱状を呈する。長さ4.2cm、最大径1.7cm、重さ18.3gを測り、面取りが施される精製品である。

4は角柱状を呈し、中心部に切り込みが施される。石鍋の器壁をそのまま残すなど雑な作りであり、3と比較すると未成品とも受け取れるものであるが、錘としての機能に支障はなかったものと思われる。長さ3.8cm、最大幅2.2cm、重さ24.9gを測る。

5は精製品であり、縦方向に1条、横方向に3条の切り込みが施され、両端面にも十字状の切り込みが施される。長さ7.1cm、最大幅2.6cm、重さ61.9gを測る。

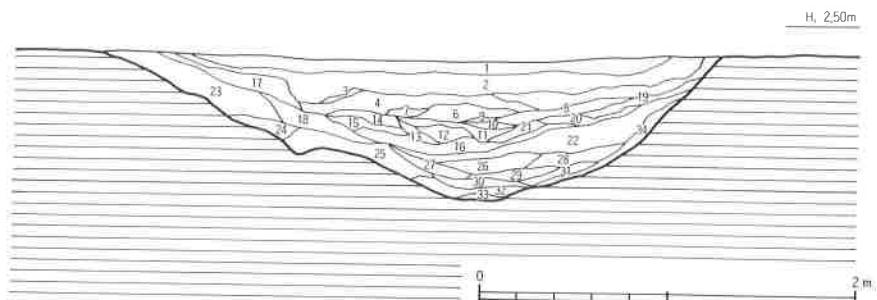
6, 7の用途は不明であるが、容器としての機能を有していたものと思われる。博多遺跡群の報告書の中には双胴の小壺としているものもあり、墨壺的なものであろうかとも思われる。

6は器高2.3cm、幅3.4cm、奥行き2.0cm、重さ14.2g、7は器高2.1cm、幅4.0cm、奥行き1.6cm、重さ15.3gを測る。

8, 9は用途は不明であるが、こて状の石製品である。8は16.6g、9は23.2gを測る。

SD-02

調査区南西部に位置する長さ40m、最大幅3.5m、深さ0.5～0.7mを測る溝状遺構である。主軸方向は、N-110°-Wを示し、SD-01の主軸方向とほぼ直行関係にある。ほぼ直線的に延びるが、僅かに西側に孕み湾曲している。

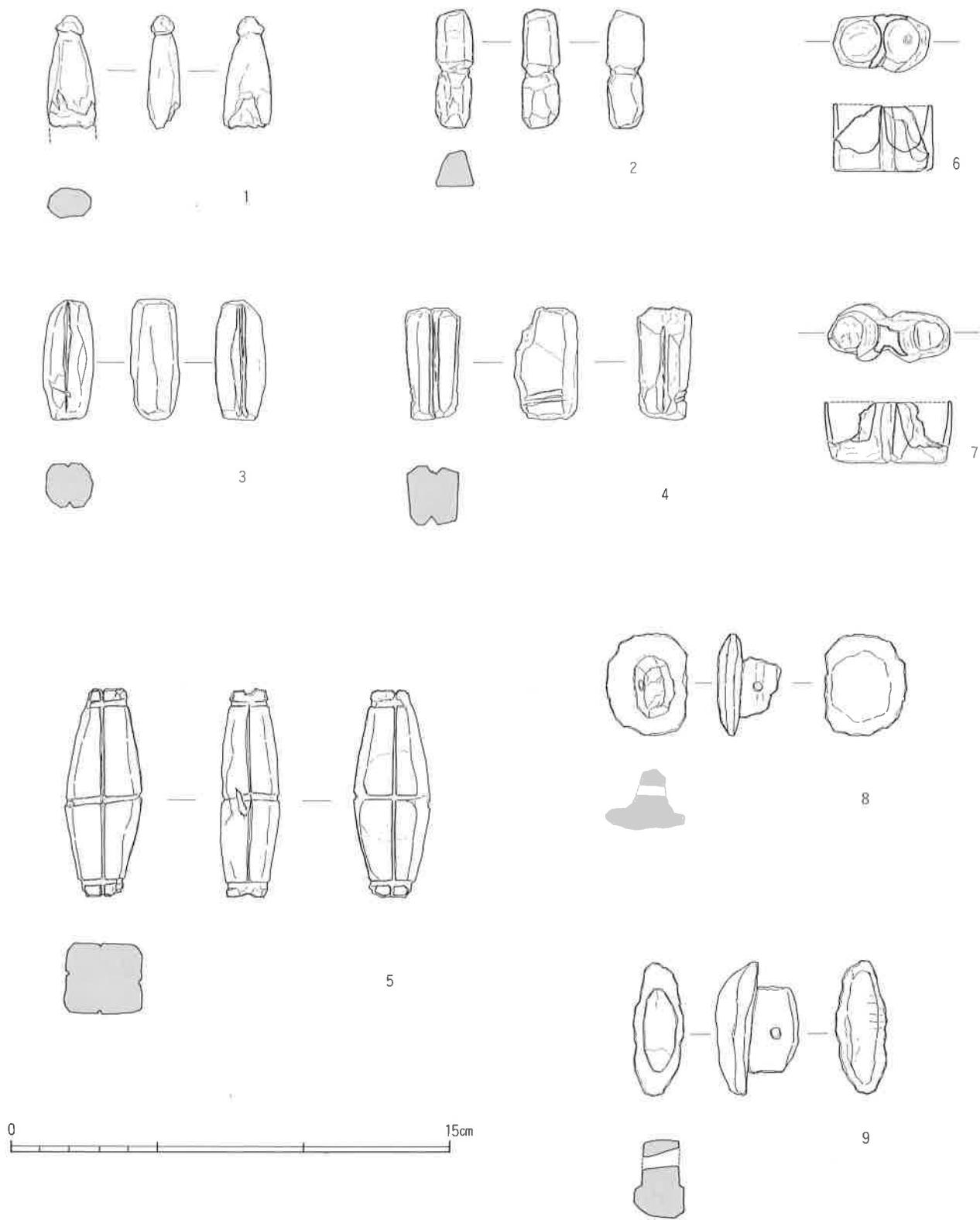


第37図 SD-02土層観察図 (縮尺1/40)

1, 明灰褐色土	7, 明黒色土(しまりがある)	13, 淡白灰褐色土	19, 明黒褐色土	25, 暗灰褐色土	31, 暗白褐色土
2, 明黒灰色土(しまりがある)	8, 明灰黒色土(褐色ブロックを多量に含む)	14, 暗灰黒褐色土	20, 明灰褐色土	26, 黒灰色粘質土(小木片を含む)	32, 淡青灰色砂質土
3, 明褐色土(黒色微小粒を多く含む)	9, 明灰黒色土	15, 暗褐色土(黒色ブロックを含む)	21, 明灰褐色土	27, 暗灰色褐色土	33, 灰褐色砂質土
4, 明褐色土(黒色粒を多く含む)	10, 明褐色土	16, 明灰黒色土(やや目が細く粘性がある)	22, 暗黒色砂質土(やや粘性がある)	28, 黑灰色砂質土	34, 白褐色土
5, 暗褐色土(黒色粒を多く含む)	11, 明灰黒色土(粘性がありややしまりがある)	17, 明黒褐色土(明褐色粒を多く含む)	23, 明褐色土	29, 明淡青灰色砂質土	
6, 暗灰黒色土(しまりがある)	12, 淡白暗褐色土(黒褐色粒を多く含む)	18, 灰褐色土	24, 暗灰黒褐色土	30, 暗淡青灰色砂質土	

SD-02出土遺物

出土遺物には土師器、瓦器、輸入陶磁器、滑石製品などがあるが細片が多く、SD-01と比較すると総量も少ない。



第38図 SD-01出土遺物実測図・5 (縮尺1/2)

(瓦器)

1は椀であり、復元口径16.6cm、器高6.0cm、高台径6.8cmを測る。カーボンの吸着は器壁内面のほぼ全体を黒色化させるまでに及ぶ。外面の研磨は、回転ヘラ削りによる器面調整の段階に生じた稜線上に施され、内面は5～6分割され粗い。12世紀初頭の所産であろう。

(白磁)

2は合子の身である、口径6.2cm、底径5.0cmに復元され、器高は5.0cmを測る。釉は透明度が高く、口縁部外端から底部全体にかけて薄く掛けられる。外面の底部付近には黒斑状の無釉部分が2ヶ所あるが、重ね焼きの痕跡であるのか、部分的に強い熱を受けて釉が炭化する状況にあったのかは残存部分が小さく判断できない。

3～8は椀の口縁部である。小片であり、径を復元するには至らない。

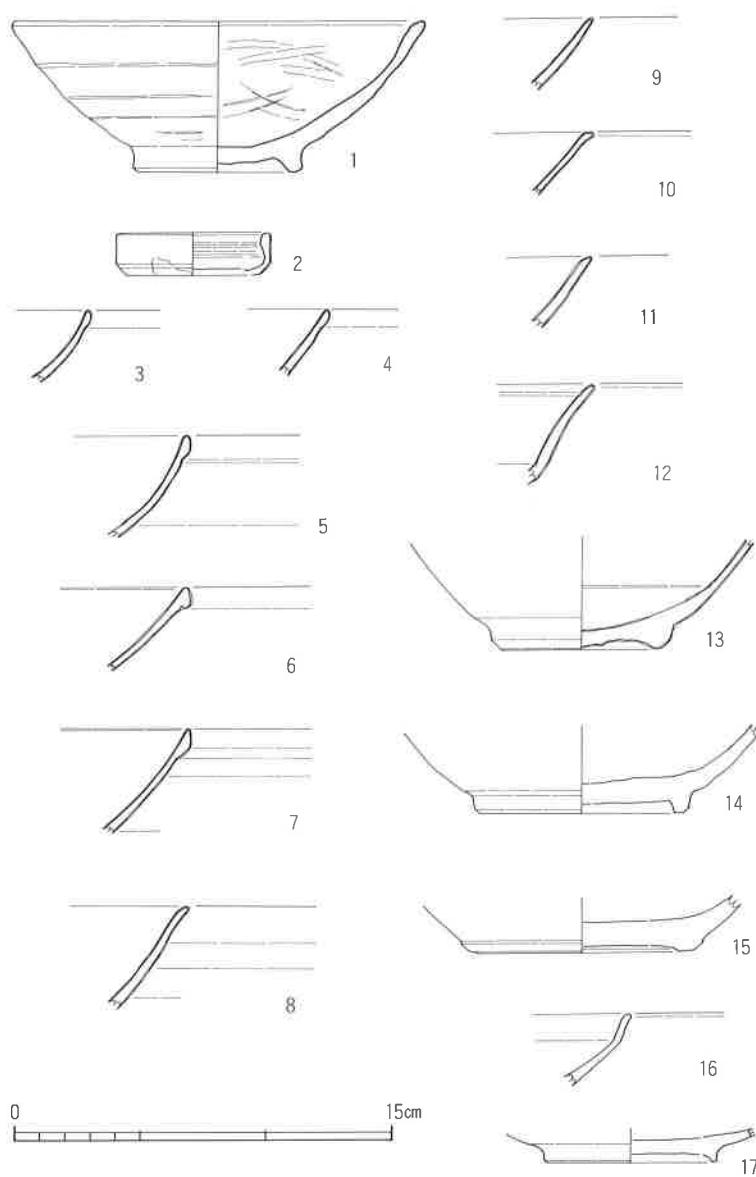
(青磁)

9～12は椀の口縁部、13～15は高台部周辺のみの残存である。9～11は越州窯系、12は龍泉窯系或いは同安窯系のものであろう。

13は高台径7.0cmを測り、僅かに黄色味を帯びる薄緑色の釉が高台底を含む器壁の全体に掛けられ、見込み部と畳み付け部にはそれぞれ5ヶ所の目跡が残される。また見込み部には1条の沈線が巡る。胎土は灰色を呈し、石英粒を僅かに含ものの精練されたものである。高麗系の遺物であろうか。

14は高台径8.5cmに復元される越州窯系青磁である。釉は透明感がなくすんだ暗緑色を呈し、器壁の全体に掛けられる。見込み部と畳み付け部には細長の目跡が残され、残存部分で4～5ヶ所確認できる。径から復元すると、12ヶ所程度の存在が想定される。

15は高台径9.5cmに復元される越州窯系青磁である。釉は定着性が悪く釉禿部分も多くみられ、高台側面より上位に掛けられる。見込み部と畳み付け部には目跡が残され、全体としては12～15ヶ所程度あったものと思われる。



第39図 SD-02出土遺物実測図・I (縮尺1/3)

(緑釉陶器)

16は口縁部のみの残存であり、小片であるため径の復元には至らない。釉は黄緑色を呈し、刷毛塗りされる。

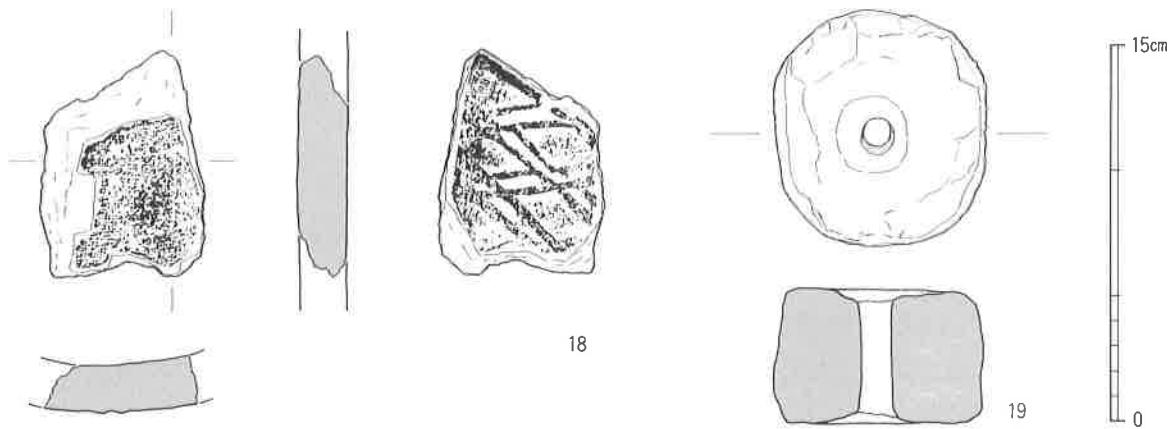
17は高台部周辺のみの残存であり、径は7.6cmに復元される。高台は低く細く、張り付け高台である。釉は薄緑色を呈し、刷毛塗りされる。

(瓦)

18は平瓦の小片であり、明らかに瓦として判断できるものはこの1点のみの出土である。上面には布目、下面には格子目の叩き痕が残される。胎土は灰色を呈し、3mm程度の石英粒を含む。

(石錘)

19は砂岩系の石材を用いた大型の錘であり、径9.5cm、厚さ5.4cm、重量約600gを測る。網に伴って使用されたものであろう。



第40図 SD-02出土遺物実測図・2 (縮尺1/3)

SD-03

SD-01の西端部南側に位置する小規模な溝状遺構である。長さ7.5m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。出土遺物は小片のみであり時期は確定できないが、隣接する同規模のSD-04と同時期であると思われ、本来は同一遺構であった可能性が高い。

SD-04

SD-03の東側に位置する溝状遺構であり、規模もそれと類似する。SD-01によって切られており、残存長5.5m、幅0.6~1m、深さ0.1mを測る。遺物の出土状況もSD-03と同様であり、時期も確定できない。

c. 大石

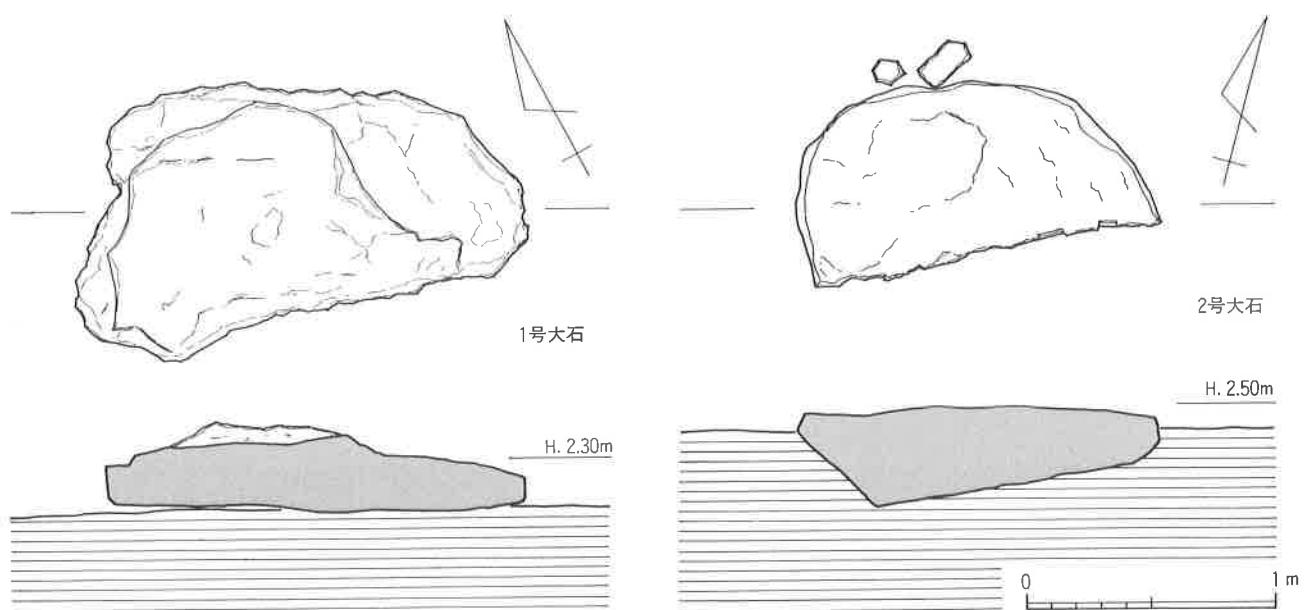
1次調査において調査区北部の緩斜面より、破壊された支石墓に伴うものと考えられる4基の大石が検出されているが、今回の調査によってもさらに4基の大石が検出された。周辺部は砂地、または湿地帯であり自然石を産する状況ではなく、支石墓の上石であるかどうかの判断は別にしても、人為的にこの地に運ばれたものであることは確実であろう。廃棄時期を示す遺物の出土はないが、中世以降の水田化に伴ない農耕活動への障害が生じたためによるものと思われ、低地への移動、破碎しての輸送、土壌中への廃棄の状況がみられる。またその際には、上面を平坦にすることが心掛けられた様子が窺われる。周辺部には、大石を破碎した段階に生じた碎片を廃棄した土壌もあり、近年においても、調査区南部付近から掘り出された大石を庭石として利用するために移送したもの、その後になって調査区に隣接する農道の脇に安置したなどという話もある。調査によって出土した4基の大石は、1次調査のものと同様に二丈町曲り田歴史スポーツ公園内において保管している。

1号大石

調査区の北西部に位置する。長さ約180cm、幅約110cm、厚さ約30cmを測り、人為的な加工は施されていない。下部構造は確認されず、砂丘上から引き下ろされたものと考えられる。

2号大石

調査区の南部に位置し、長さ約140cm、幅約70cm、厚さ20~40cmを測る。平面形は半円形状を呈し、鑿状工具により破碎された痕跡が残される。遺構検出面下30cmは砂中に埋もれており、プランは確認できなかったが、土壌中に廃棄されていたものと思われる。



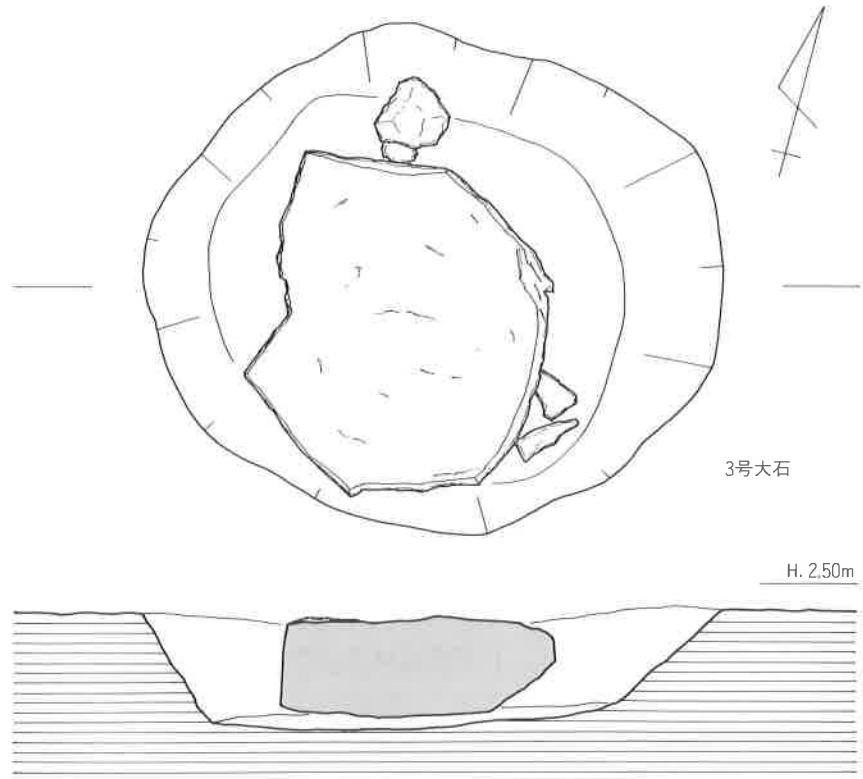
第41図 1, 2号大石実測図（縮尺1/30）

3号大石

調査区の南部に位置し、長さ約140cm、幅約120cm、厚さ約40cmを測る。表面に加工痕は残されておらず、長径約230cm、短径約210cm、深さ約50cmを測る円形の土壙中に廃棄される。

4号大石

2, 3号大石とともに調査区の南部に位置する。長さ約190cm、幅約90cm、厚さ約30cmを測り、平面形は橢円状を呈する。長軸約235cm、短軸約150cm、深さ約30cmを測る土壙中に廃棄される。石の底面には炭化物が付着しており、廃棄段階において何らかの祭祇行為を行なった可能性も考えられる。



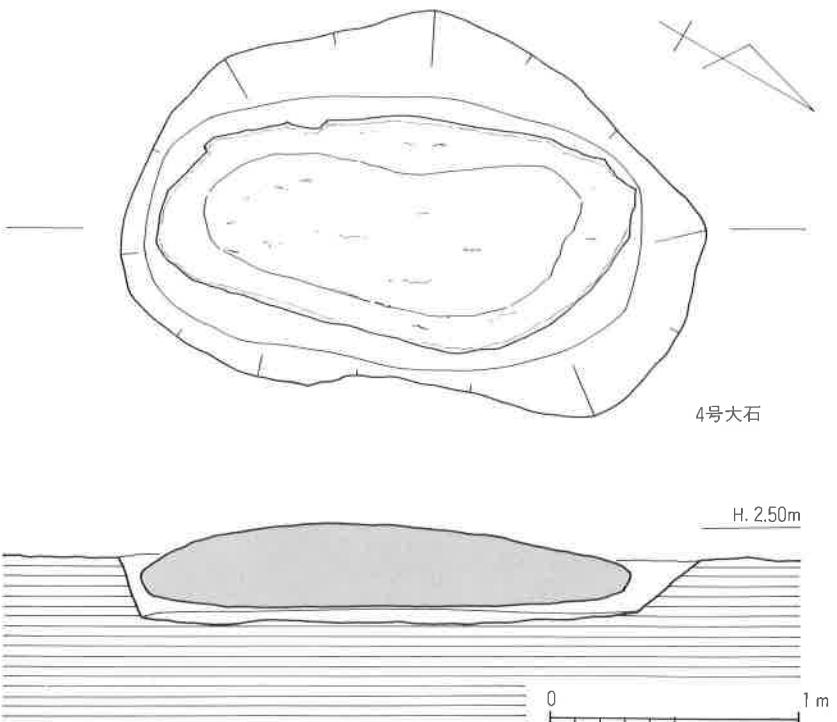
d. その他の遺構

SX-01

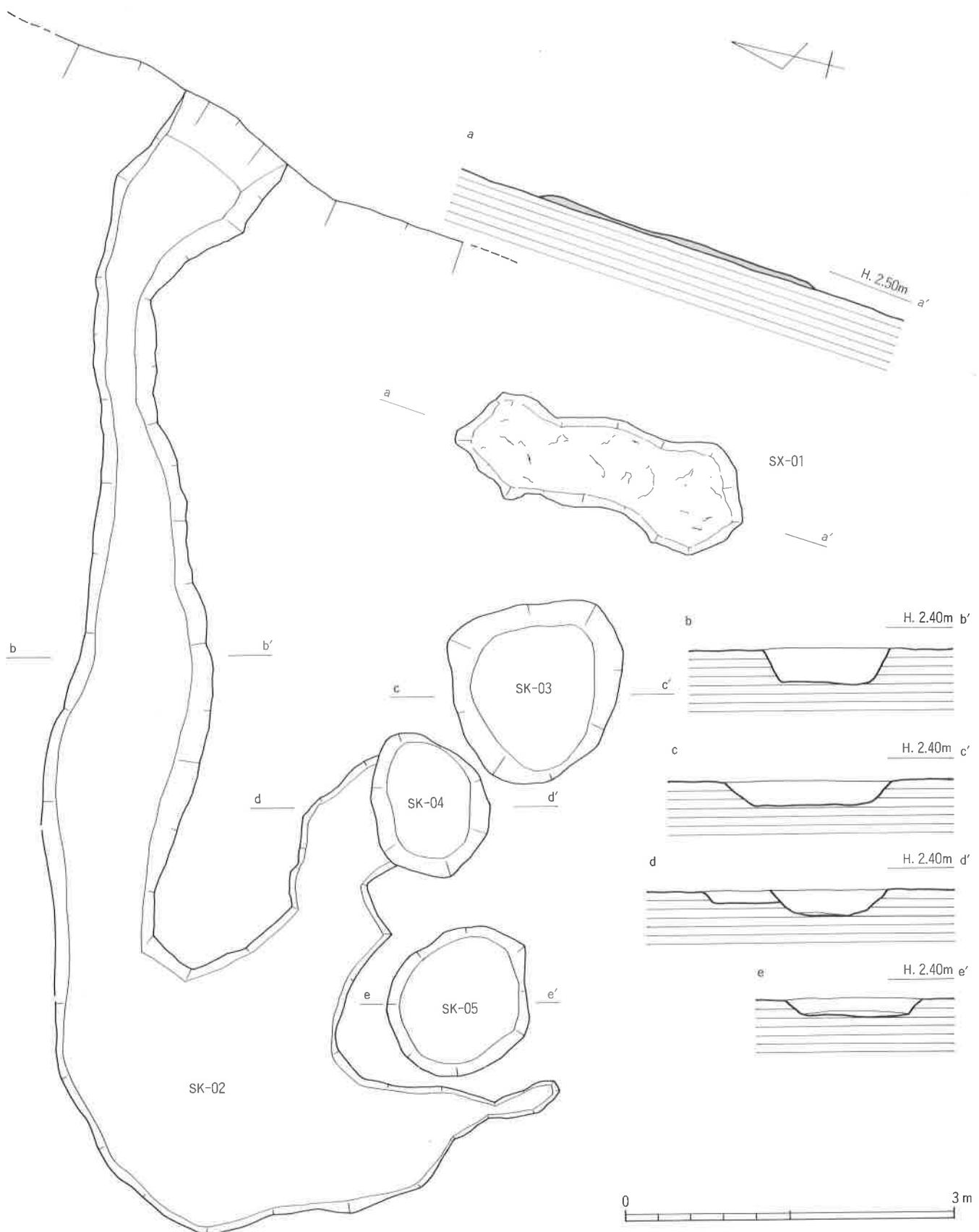
調査区北部の砂丘面から湿地面への傾斜変換線の湿地面よりに位置し、SK-02の東側に近接する粘土塊である。粘土と周辺包含層に含まれる遺物には、土師器、黒色土器の他に、椀形溝、フイゴ羽口などの製鉄関連遺物があり、何らかの鍛冶作業に伴う遺構であると考えられるが、詳細は不明である。

SK-02

調査区北部に位置し、不整形に蛇行する。埋土に含まれる土師器の小皿などから11世紀初頭に位置づけられるが、遺構の性格は不明瞭である。周辺部の包含層や土壙



第42図 3, 4号大石実測図 (縮尺 1/30)



第43図 SX-01, SK-02~05実測図 (縮尺 1/50)

は鉄滓、フイゴ羽口が出土しており、埋土には炭化物の細粒を多く含みまれる。製鉄に関連するものかとも思われるが、詳細は不明である。

SK-03

SX-01の南側に近接する土壙であり、径約160cm、深さ約20cmの不整円形を呈する。椀形溝、フイゴ羽口などの出土がある。直接的に製鉄に伴う遺構ではないが、周辺部に関連する遺構があったものと思われる。

SK-04

SK-02の南端部を切る土壙であり、長径約140cm、短径約100cmの不整橢円形を呈する。

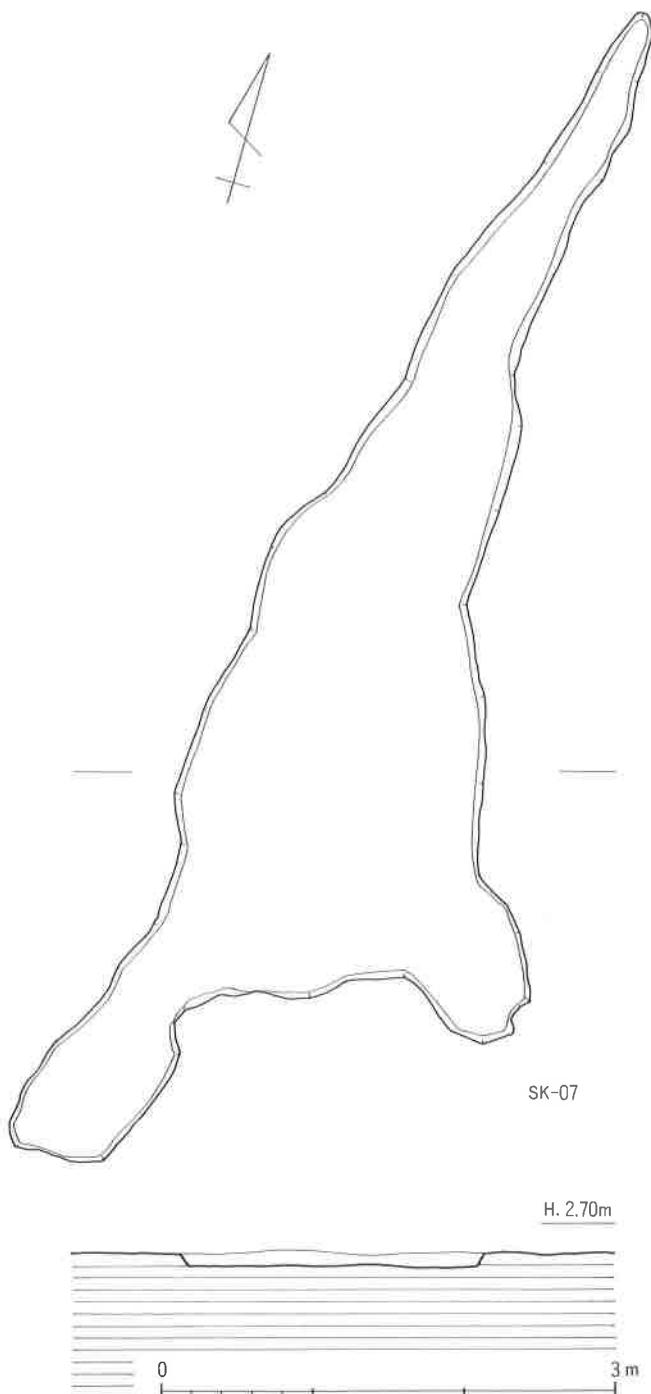
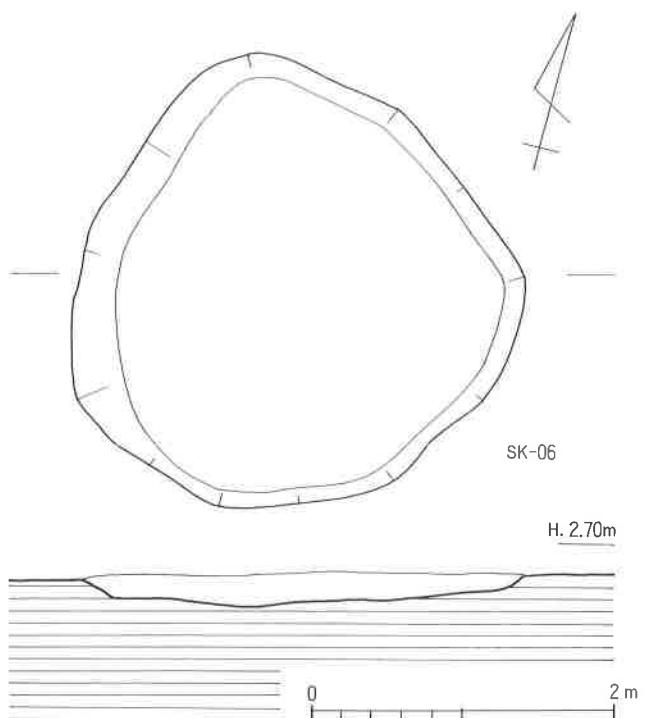


SK-05

SK-01の西側に近接する。径約120cmの不整円形を呈し、深さ約15cmを測る。

SK-06

平面形は円形を呈し、径約300cm、深さ20cmを測る。遺構の時期を判断できる遺物の出土はない。



第44図 SK-06, 07実測図 (縮尺 1/50)

SK-07

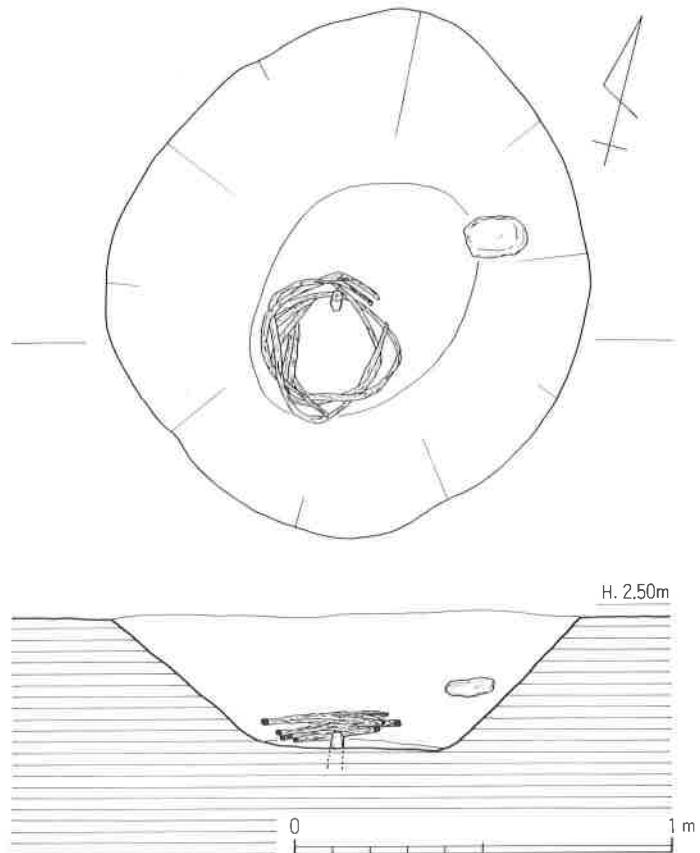
長さ約840cm、深さ約8cmを測る。出土遺物は細片のみであり、時期も性格も不明である。

SK-08

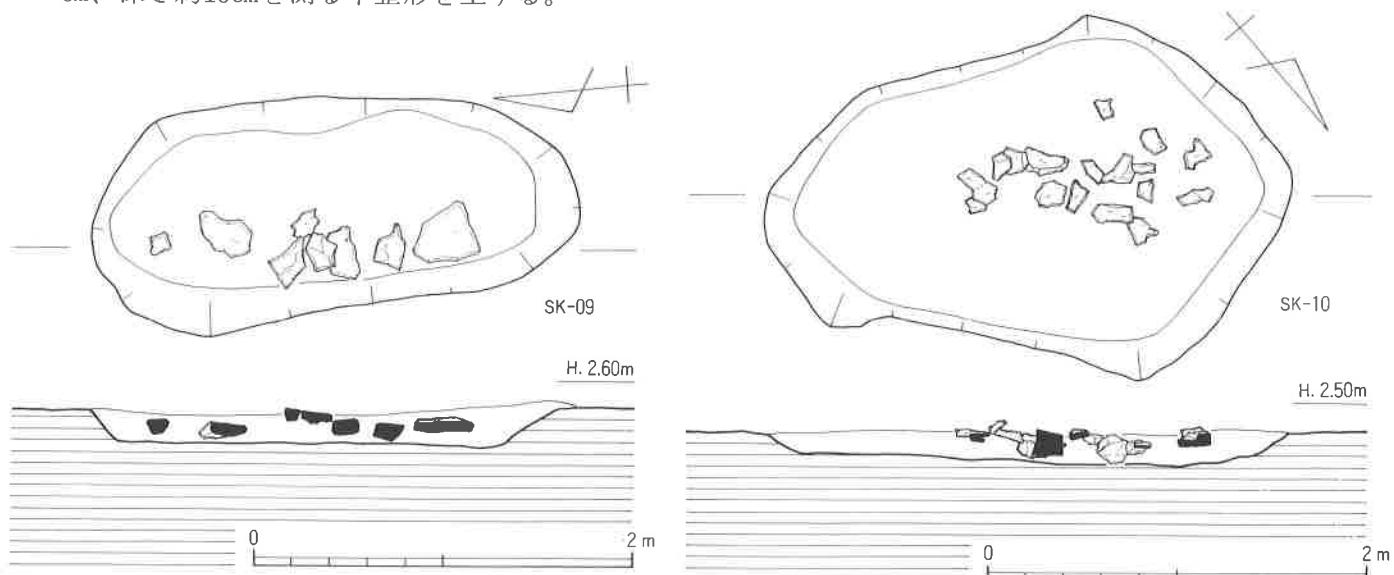
径約130～140cm、深さ約35cmを測り、平面形は円形を呈する土壙である。底部には杭が打たれ、蔓状の植物遺体を巻き付けたものが出土した。湿地を利用しての貯蔵、或いは加工しやすいように水に浸しておいたものであろう。遺構の年代を示す遺物の出土はないが、12世紀以降は水田として利用されていたものと考えられる周辺の土地利用状況の変遷から、それ以前のものであると考える。

SK-09, SK-10

調査区南部に位置する大石の破碎段階に生じた碎石を廃棄した土壙である。SK-09は長径約260cm、短径約110cmの楕円形状を呈し、深さは約20cmを測る。SK-10は長径約280cm、短径約120～190cm、深さ約15cmを測る不整形を呈する。



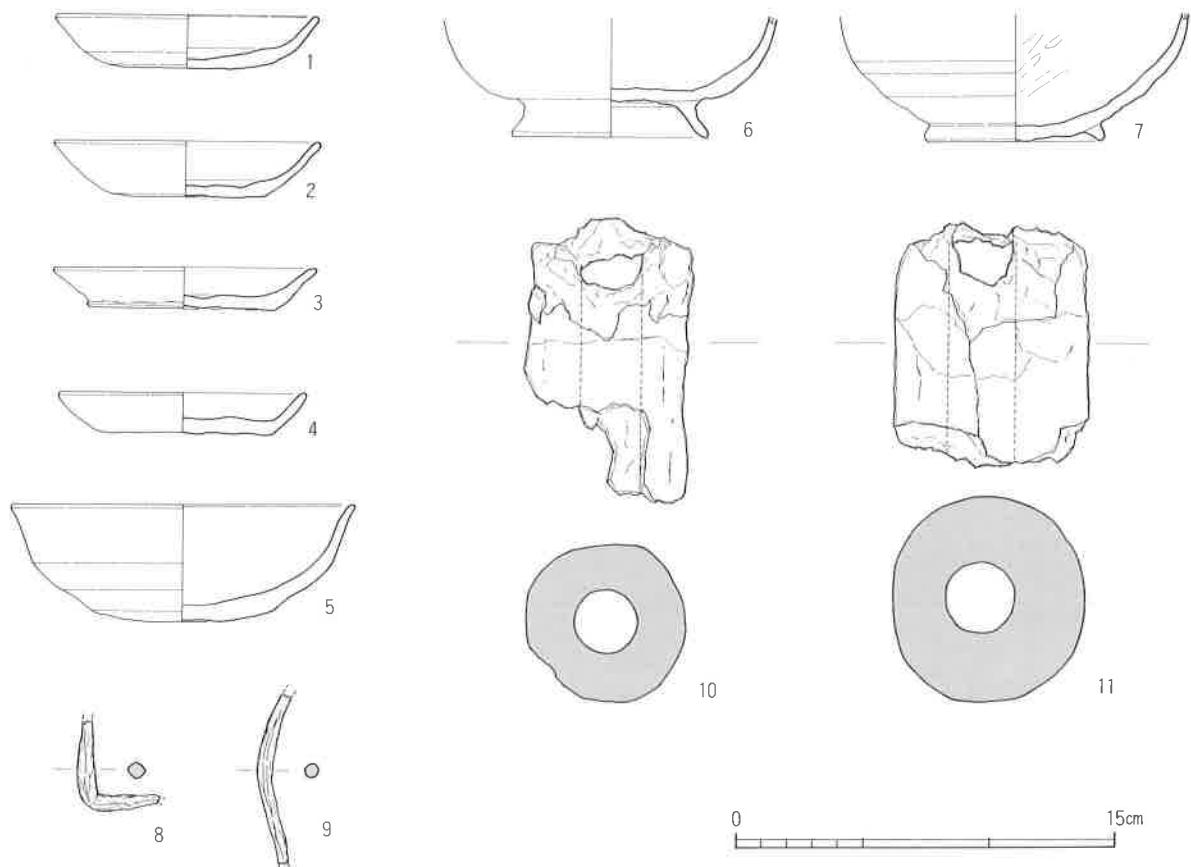
第45図 SK-08実測図（縮尺1/20）



第46図 SK-09, 10実測図（縮尺1/40）

(出土遺物)

- 1～3はSK-02から出土した土師器の小皿である。底部の切り離しは全てヘラ切りによる。1は口径10.5cm、器高2.1cm、2は口径10.7cm、器高2.2cm、3は口径10.5cm、器高1.7cmを測る。
- 4～9はSX-01周辺からの出土である。
- 4は黒色土器A類の小皿であり、口径10.0cm、底径6.9cm、器高6.9cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りによるものである。
- 5は土師器の丸底杯であり、口径13.6cm、器高4.6cmに復元される。底部の整形には押し出し技法は用いられていない。
- 6は土師器の椀の高台部周辺である。高台径7.8cmを測る。7は黒色土器A類の椀である。高台径7.2cmを測り、内面には粗い研磨が施される。
- 8、9は鉛製の錘であり、海の中道遺跡などに類例が知られる。8は重さ11.9gを測りL字形に屈曲し、9は重さ13.7gを測り、緩く湾曲する。
- 10、11はフイゴの羽口であり、10はSK-03から、11はその周辺包含層からの出土である。10は外径5.0～6.3cm、孔径2.5cmを測り、先端部にはガラス状の融解物が付着する。器表の変色具合からは炉壁に対して約45°の角度をもって挿入されていたことが推察できる。11は外径7.8cm、孔径2.8cmを測る。先端部は欠落しているものの融解物の付着が全体的にみられるため、使用中における高熱により破損したものであると思われる。



第47図 SX-01, SK-02, 03出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

III. おわりに

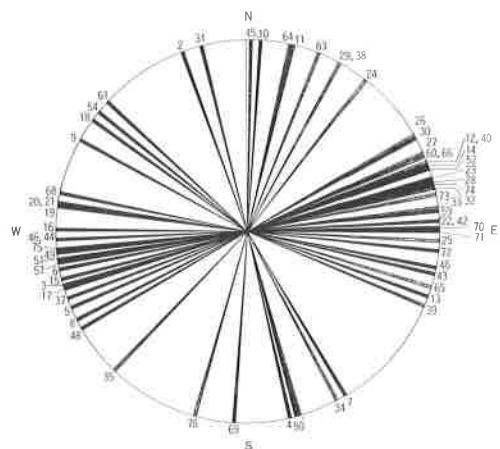
甕棺墓の主軸方位について

木舟・三本松遺跡からは、3次にわたる発掘調査によって計68基の甕棺墓が検出された。これらにはいくつかの群構成がみられるものの、列埋葬は行なわれておらず、一見、無秩序で雑多な印象をうける。しかしながらこの雑多な群構成の中には、一般的に地形との関係で説明されることが多い主軸方位については、それ以外の何らかの主体的要因によって生じたと考えられるある種の指向性ともいべき共通性の存在を想定できるように思われ、以下に若干の検討を加えてみたい。

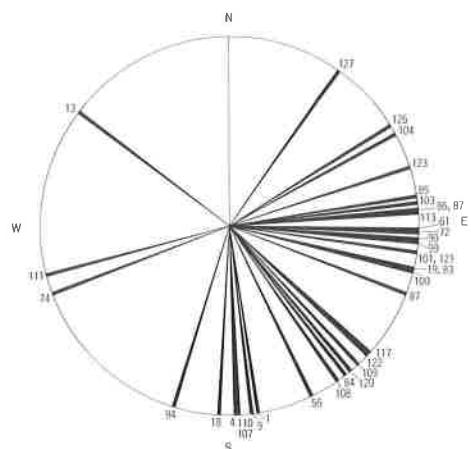
木舟・三本松遺跡から発見された甕棺墓は、いずれからも人骨は検出されておらず、また、棺体の依存状況も悪いために、頭位方向を確定することができるものは少ない。しかしながら、棺体の主軸方位を捉えることができるものは少なくはなく、それが頭位、或いは足位方向のいずれを意識したものであるかは不明瞭であるにせよ、棺体の指向性を確認する資料にはなり得るものであると考える。グラフ1は、主軸方位の判断できる甕棺墓の主軸方向を磁北を基準として示したものである。これによれば、N-60°-E～S-67°-Eの53°間、S-60°-W～N-78°-Wの42°間に主軸方向が集中する傾向が窺え、主軸方位が確認できる68基の甕棺墓のうちの68%を占める46基の甕棺墓がこの中に含まれる。また、この46基の甕棺墓のうちの22%が副葬品を伴うものであり、副葬品を伴う11基の甕棺墓のうちの、実に82%を占める9基の甕棺墓がこの中に含まれている。このことから、この墓群を構成した集団にとって、これらの方位が何らかの意味合いをもっていたであろうことが想定できないであろうか。しかしながら、削平により遺跡周辺の旧地形が著しく改変された後の調査状況によっては、これらの現象が地形的な要因によって生じたものであることを否定することは困難である。そこで、佐賀県唐津市に所在する宇木汲田遺跡の甕棺墓群を分析してみたい。

宇木汲田遺跡からは、1957年～1966年にわたる数次の調査の結果、前期から後期までの129基の甕棺墓が検出され、そのうちの37%を占める48基からは、副葬品その他の遺物の出土

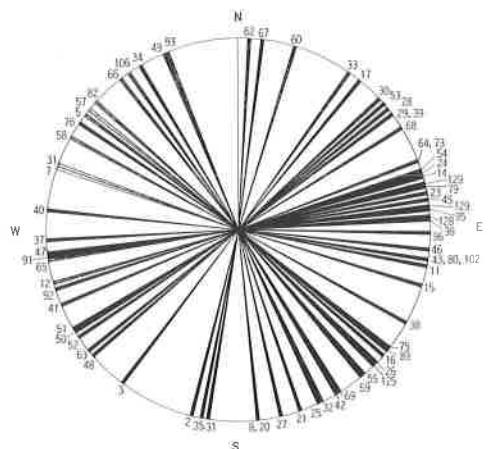
グラフ1. 木舟・三本松遺跡



グラフ2. 宇木汲田遺跡・前期



グラフ3. 宇木汲田遺跡・中期



があった。グラフ2、3は前期と中期の甕棺墓のうち主軸方位を確定できる109基の主軸方位を時期別に示したものであるが、前期の甕棺墓については主軸方向に偏った傾向がみられ、N-82°-E～S-68°-Eの間、S-47°-E～S-25°-Eの間、S-8°-E～S-18°-Wの間の3方向に集中していることが分かり、特にE-8°-N～E-22°-Sの30°間には40%を占める14基が集中する。また、中期についてはある程度の偏りが窺えるものの、前期ほどの顕著な傾向はみられない。このことは、これらの甕棺墓がこの墓群の中で最も早い段階につくられたものであるため、他の墳墓の占地によって受ける影響が少なく、甕棺墓の方向を自由に選択できる余地が残されていたために生じた現象であると考えられる。また、グラフ3においては顕著な傾向は窺えなかったものの、グラフ4においては

中期の甕棺墓にもこの指向性は確認できる。グラフ4は中期の甕棺墓のうち、副葬品を伴うものの主軸方向を示したものであるが、これによれば、そのうちの65%にあたる21基の甕棺墓が、N-70°-E～S-72°-Eまでの39°間、S-68°-W～S-88°-Wまでの21°間に集中していることが分かる。このことは、限られた面積の墓群内において、青銅器を代表とした副葬品を副葬できる立場にあった有力者層の墳墓が優先して選地された結果の状況を示すものであり、この場合において、何らかを基準にしたある幅をもった方向が好まれたということが考えられるのである。この両遺跡における甕棺墓の主軸方向が偏向する方位は、その角度幅については若干の相違がみられるものの、互いに近似した方向を示しており、その方向に何らかの意味があるものと考えられ、福岡県糸島郡志摩町に所在する新町遺跡においても同様な傾向が窺える。³⁾また、両者を直接的に関連づけることはできないものの、青森県源常平遺跡の縄文時代晩期の土墳墓群には、埋葬段階において太陽の方向が基準になったと考えられるという見解があり、現段階ではその積極的な根拠を提示することはできないが、木舟・三本松遺跡と宇木汲田遺跡という背振山地によって隔たれた両遺跡に共通して捉えられることのできる視準が存在したとするのならば、天体の示す方向が最も蓋然性の高いものと考えられ、これらの角度幅が夏至と冬至の日の出方向の角度、角度幅と近似することから、日の出、日の入りの方向を基準として棺体が据えられたものとも考えられる。さらにこの仮説が成立した場合、被葬者の死亡時の太陽の動きによって角度幅が生じた可能性も考えられるのではないだろうか。また、地形以外の基準をもって主軸方向が決定されたといった点においては列埋葬と共にする概念であるとも考えられる。しかしながら、仮説の是非、列埋葬との関係、群構成の在り方など、この問題については残された課題が多くあり、今回は事例の報告にとどめ、今後の研究課題としたい。

グラフ4. 宇木汲田遺跡・中期の副葬品を伴うもの

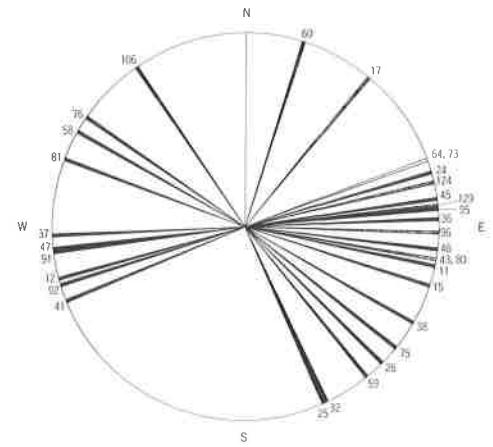


図 版

図版目次

図版 1	木舟・三本松遺跡 3 次調査区全景 (空中写真、上方が南)	図版16-a	75号甕棺
図版 2-a	調査区全景 (空中写真、北から)	- b	76号甕棺
- b	S D-02土層断面 (南から)	- c	S K-01出土土器-1
図版 3-a	68号甕棺墓 (北から)	図版17-a	S K-01出土土器-2
- b	69号甕棺墓 (西から)	- b	S T-01 (木棺墓) 出土白磁碗
図版 4-a	70号甕棺墓 (南から)	図版18-a	S T-01 (木棺墓) 出土土錘
- b	71号甕棺墓 (北から)	- b	S T-01 (木棺墓) 出土石鎌
図版 5-a	72号甕棺墓 (北から)	図版19-a	S D-01出土滑石製品
- b	73号甕棺墓 (南から)	- b	S D-01出土白磁
図版 6-a	72, 73号甕棺墓 (西から)	- c	S D-01出土高麗青磁
- b	74号甕棺墓 (南から)	- d	S D-02出土瓦
図版 7-a	75号甕棺墓 (南から)	- e	S D-02出土石錘
- b	76号甕棺墓 (西から)	- f	S X-01周辺出土鉛製錘
図版 8-a	S K-01全景 (西から)		S K-03周辺出土フイゴ羽口
- b	S K-01遺物出土状況 (西から)		
図版 9-a	S T-01 (木棺墓) 遺物出土状況 (東から)		
- b	S T-01完掘状況 (南から)		
図版10-a	S T-01遺物出土状況 (南から)		
- b	1号大石 (南から)		
図版11-a	2号大石 (東から)		
- b	3号大石 (北から)		
図版12-a	4号大石 (西から)		
- b	S K-08蔓状遺物出土状況 (北から)		
図版13-a	S K-09全景 (西から)		
- b	S K-10全景 (北から)		
図版14-a	68号甕棺		
- b	68号甕棺墓棺内出土管玉		
- c	69号甕棺		
- d	70号甕棺		
図版15-a	71号甕棺		
- b	72号甕棺		
- c	73号甕棺及び棺内出土石鎌		
- d	74号甕棺		



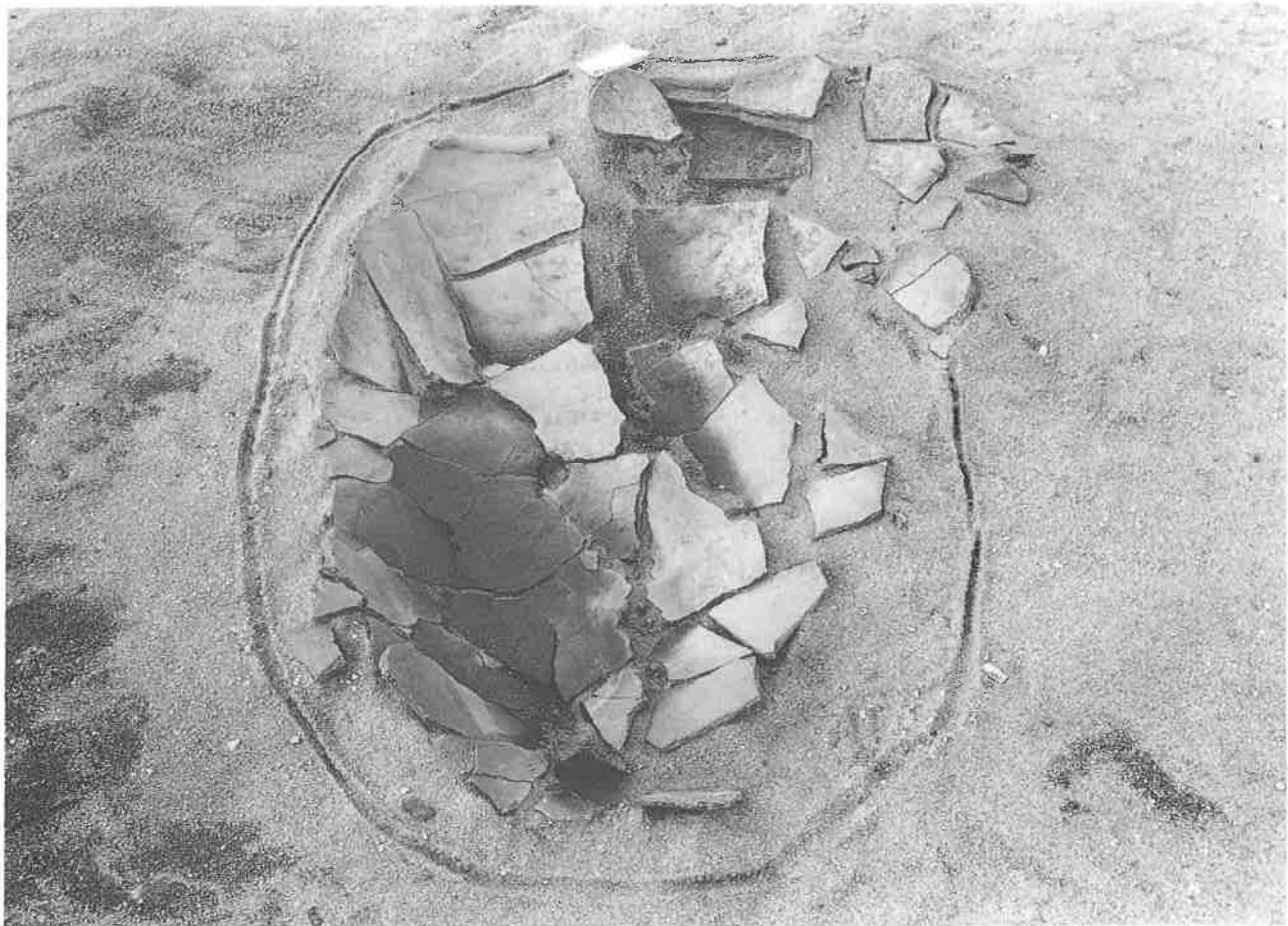
木舟・三本松遺跡 3 次調査区全景（空中写真、上方が北）



a. 調査区全景（空中写真、北から）



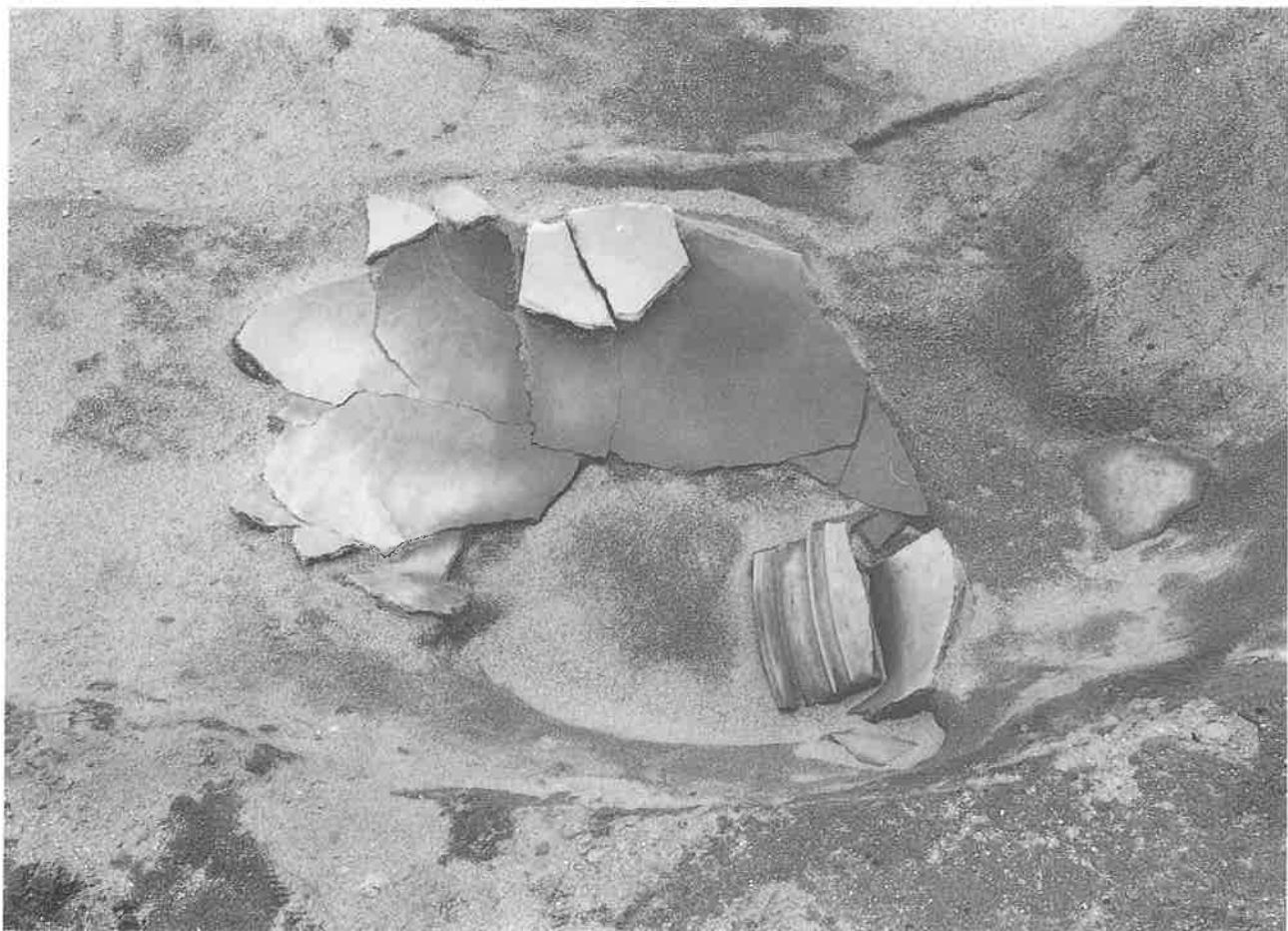
b. SD-02土層断面（南から）



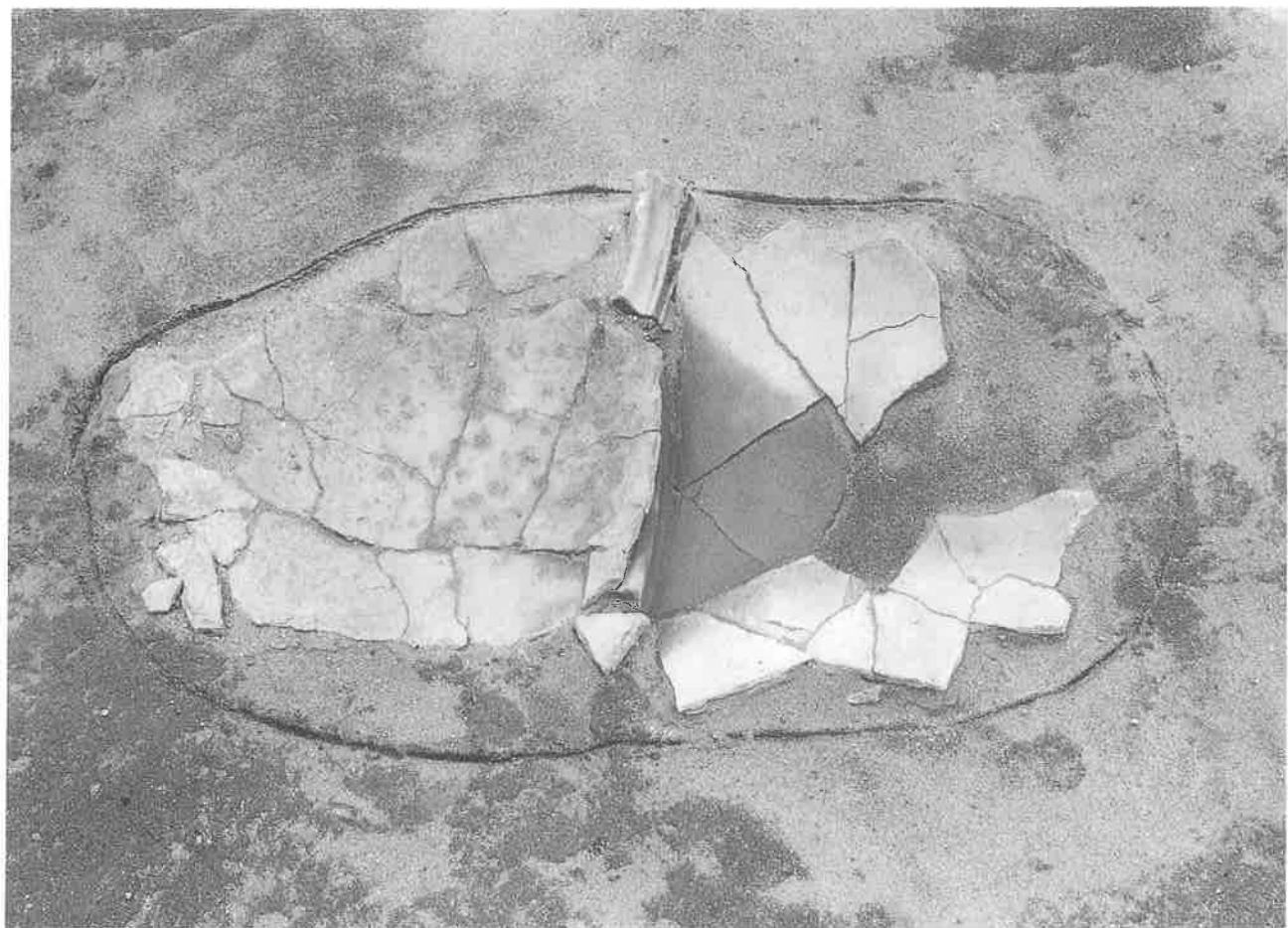
a. 68号壺棺墓（北から）



b. 69号壺棺墓（西から）



a. 70号甕棺墓（南から）



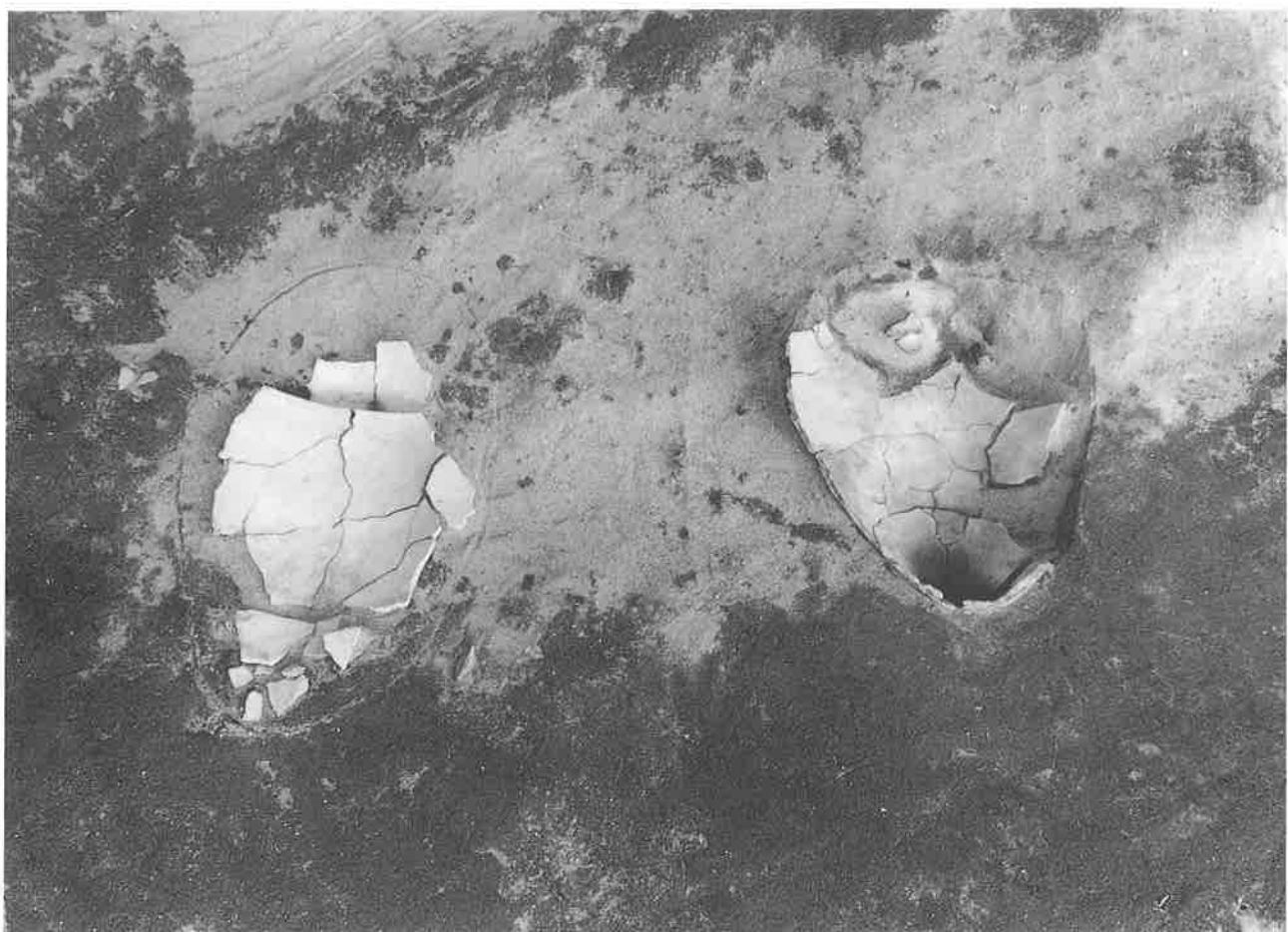
b. 71号甕棺墓（北から）



a, 72号甕棺墓（北から）



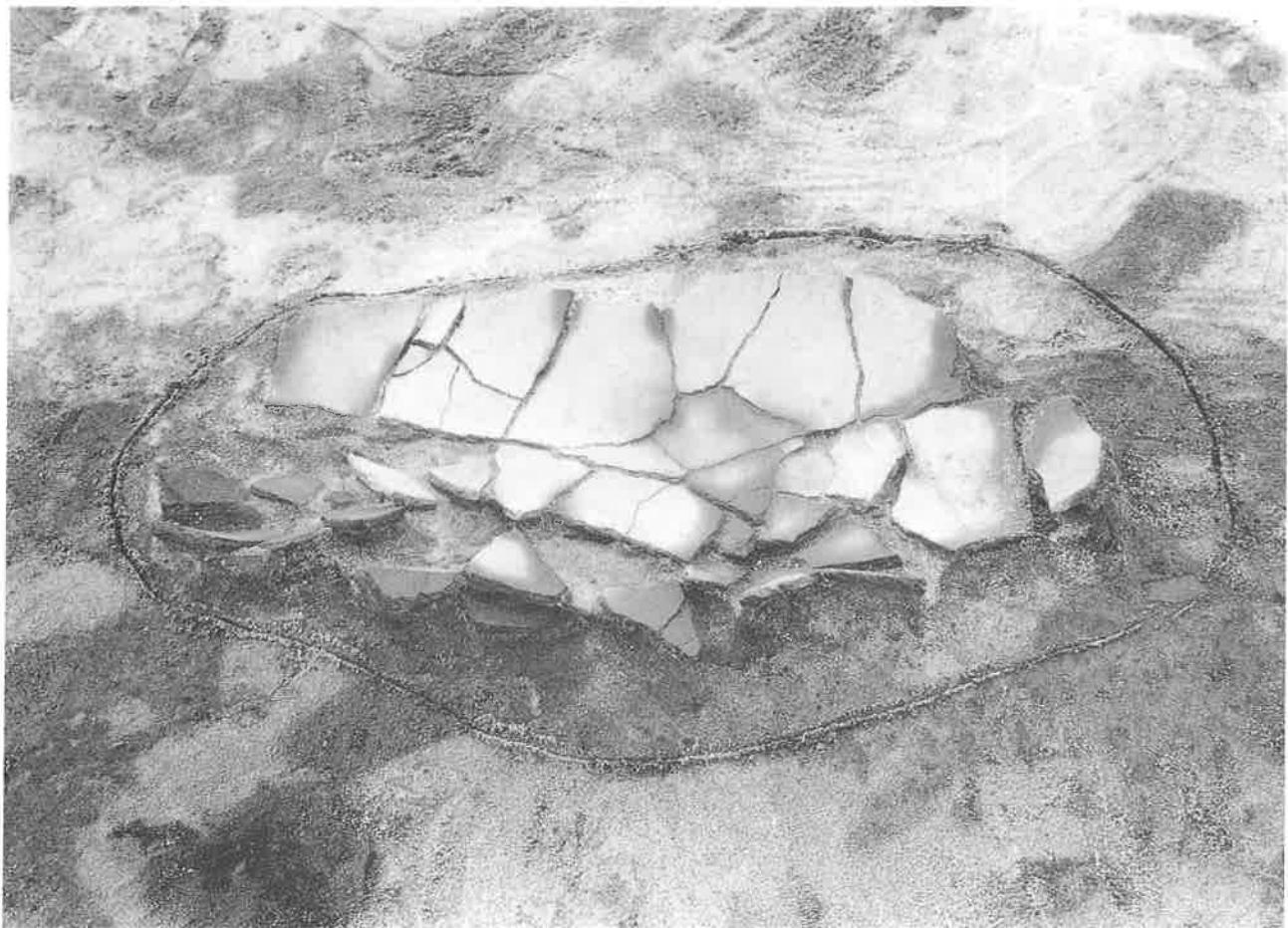
b, 73号甕棺墓（南から）



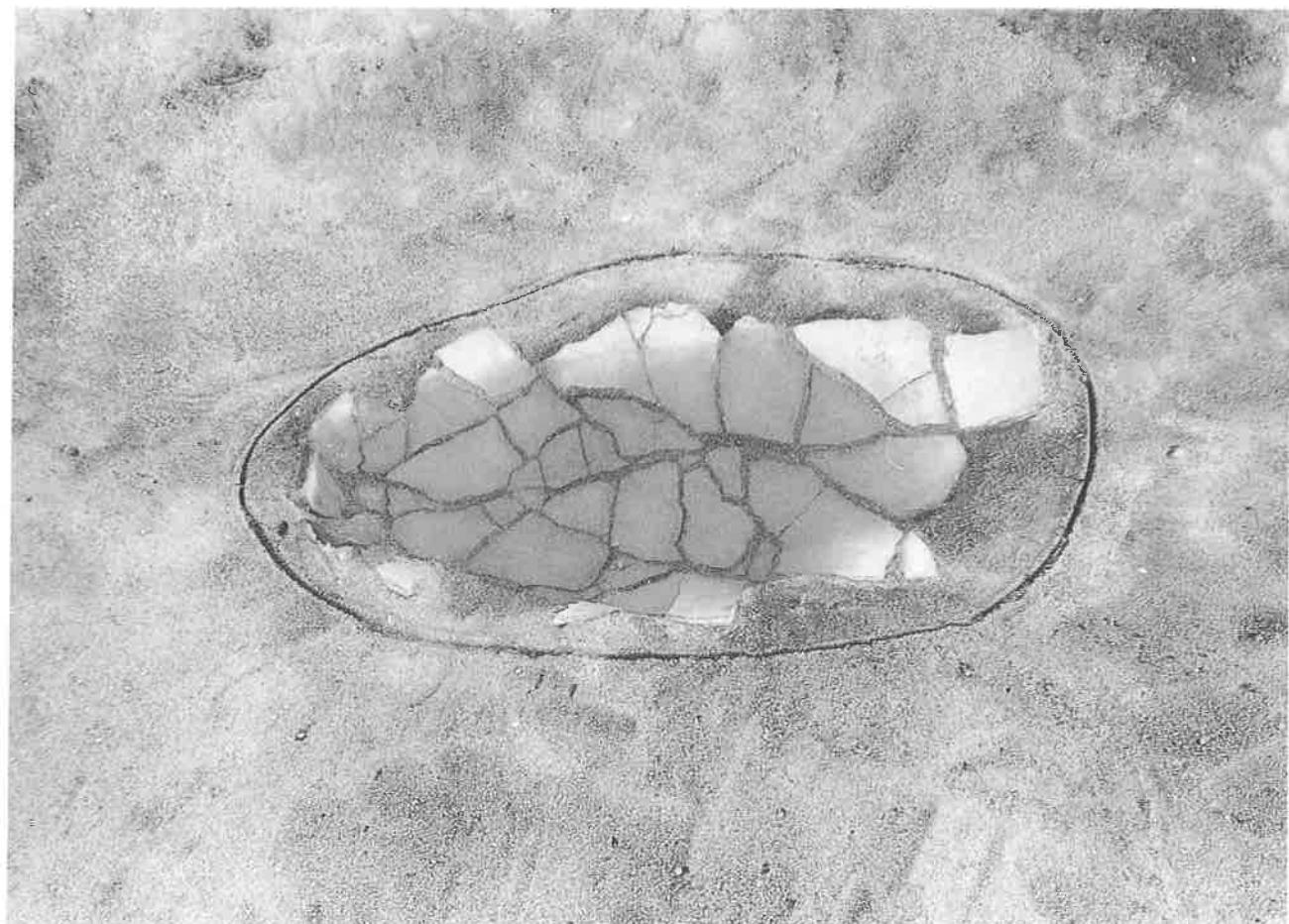
a. 72、73号甕棺墓（西から）



b. 74号甕棺墓（南から）



a. 75号甕棺墓（南から）



b. 76号甕棺墓（西から）



a. SK-01全景（西から）



b. SK-01遺物出土状況（西から）



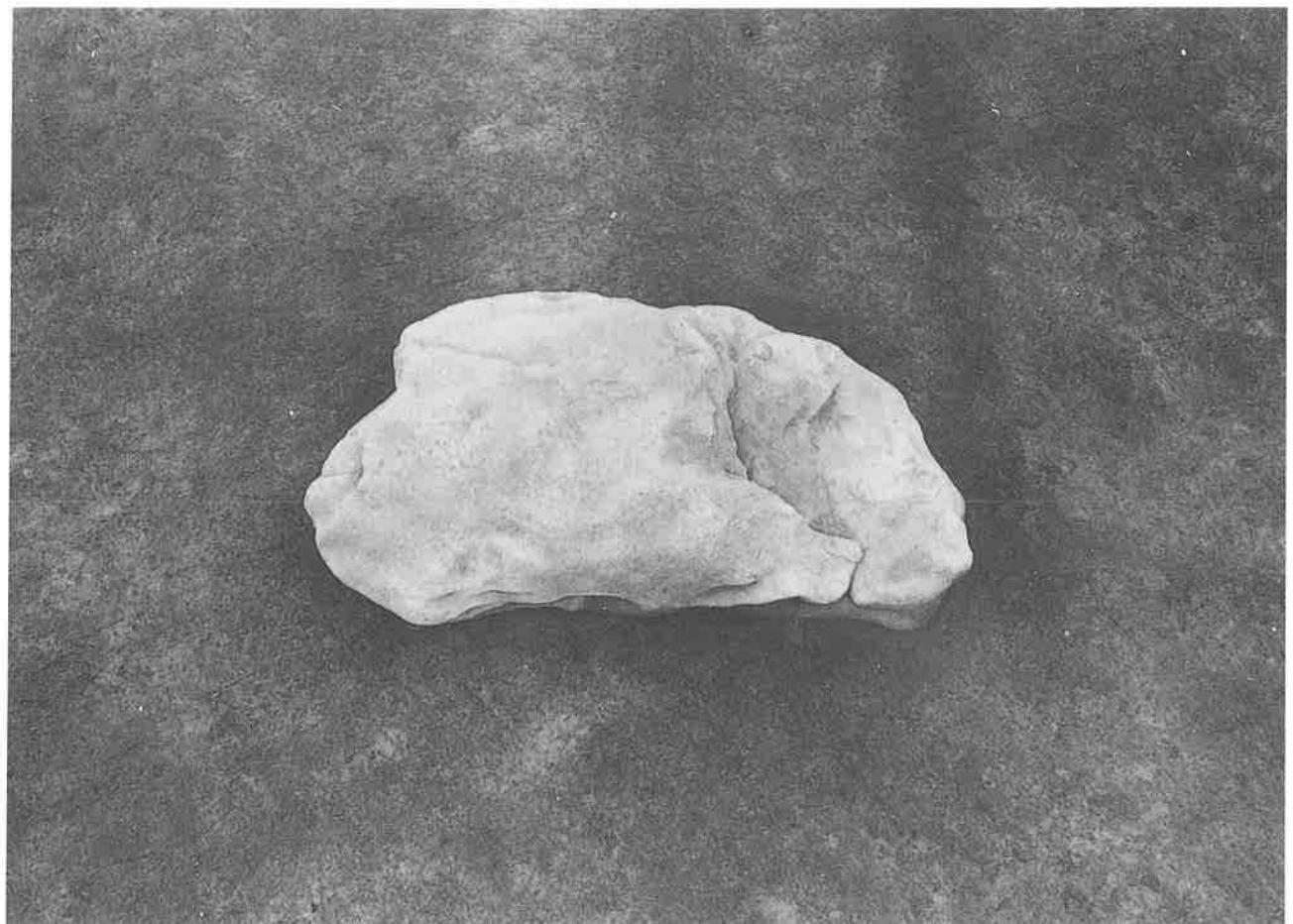
a. ST-01 (木棺墓) 遺物出土状況 (東から)



b. ST-01完掘状況 (南から)



a. ST-01遺物出土状況（南から）



b. 1号大石（南から）



a. 2号大石（東から）



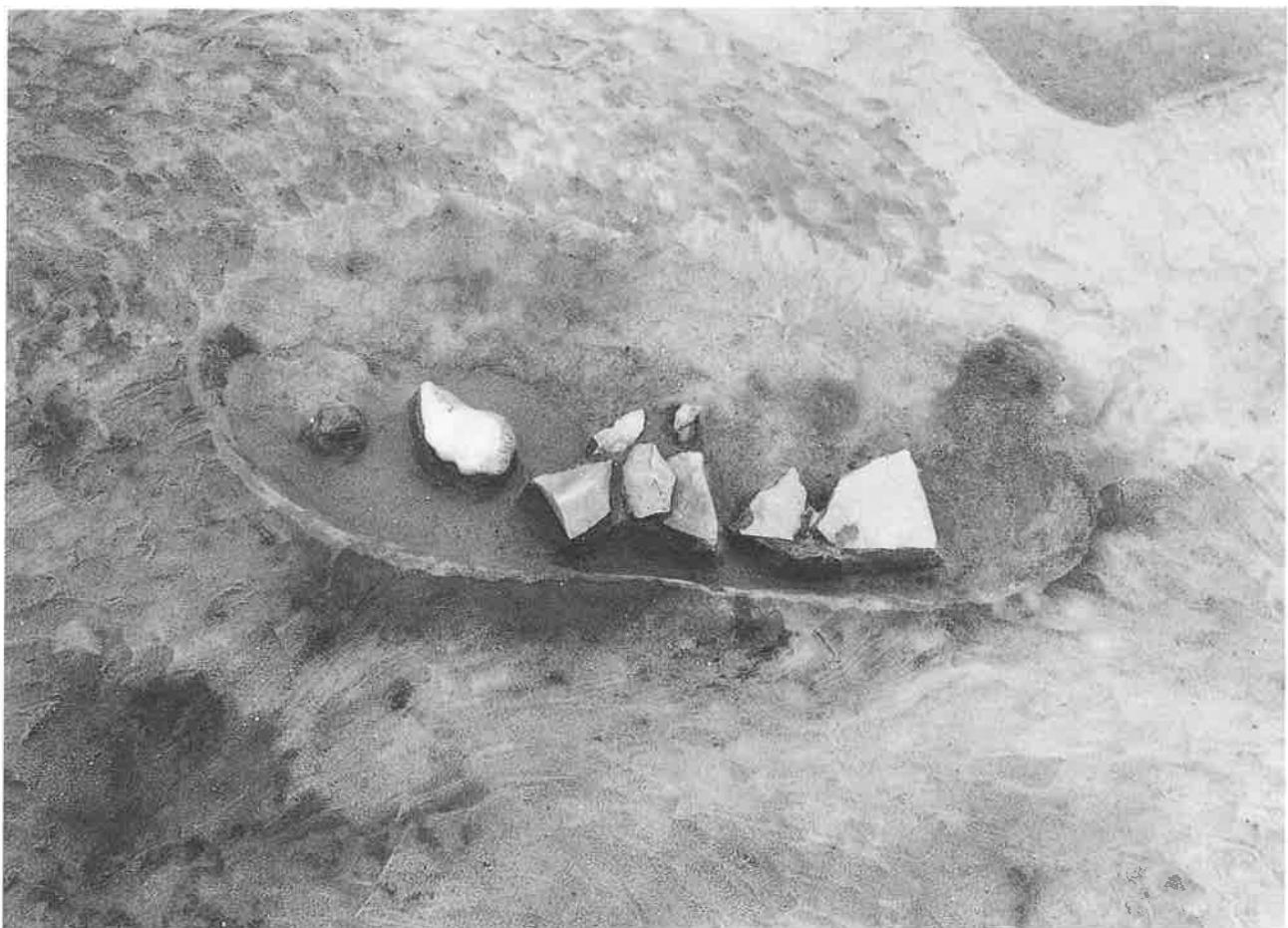
b. 3号大石（北から）



a. 4号大石（西から）



b. SK-08墓状遺物出土状況（北から）



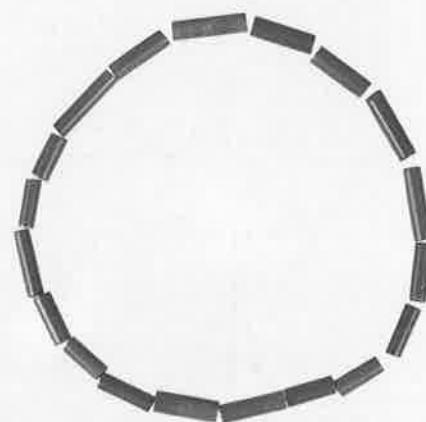
a. SK-09全景（西から）



b. SK-10全景（北から）



a. 68号甕棺



b. 68号甕棺墓棺内出土管玉



c. 69号甕棺



d. 70号甕棺



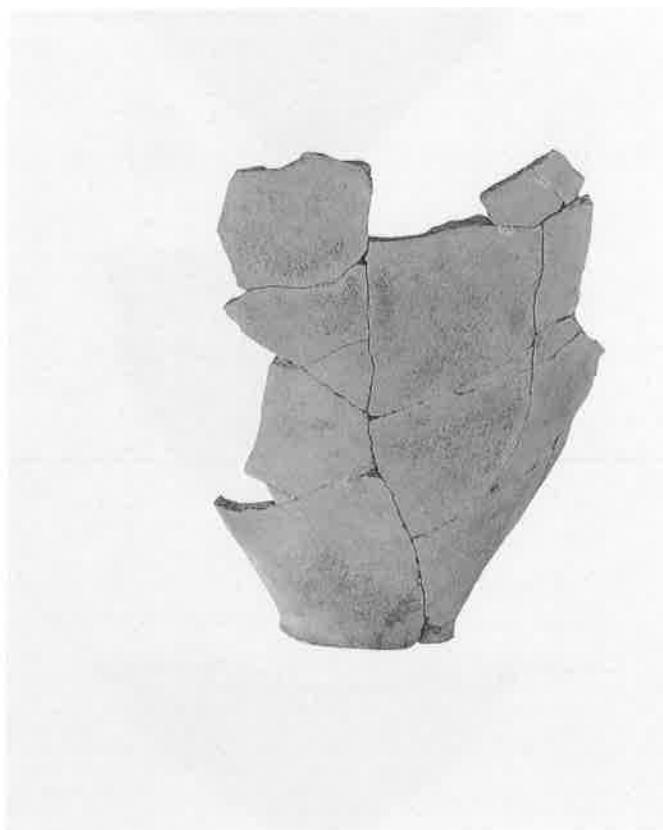
a. 71号甕棺



b. 72号甕棺



c. 73号甕棺及び棺内出土石鎚



d. 74号甕棺



a. 75号甕棺



b. 76号甕棺



1



2



3



5

c. SK-01出土土器-1



a. SK-01出土土器 - 2



b. ST-01 (木棺墓) 出土白磁碗

1



2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

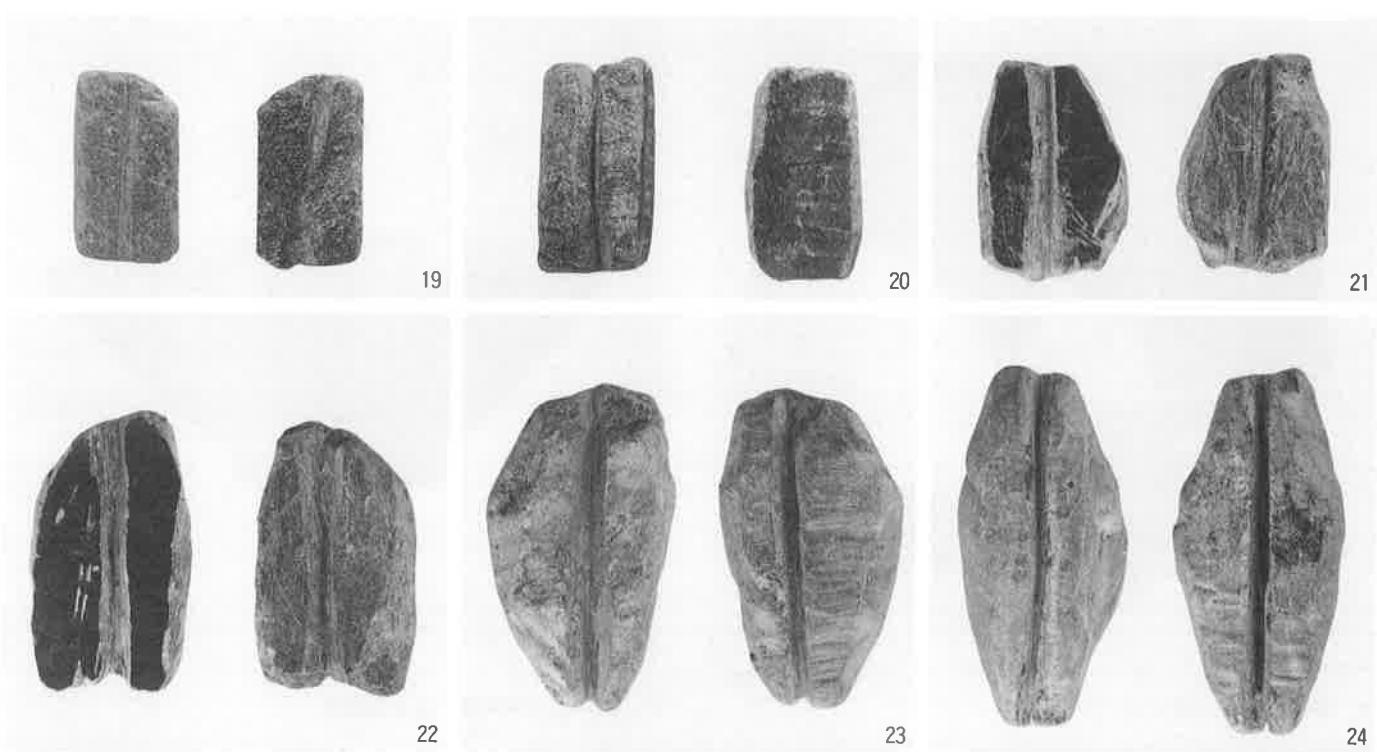
15

16

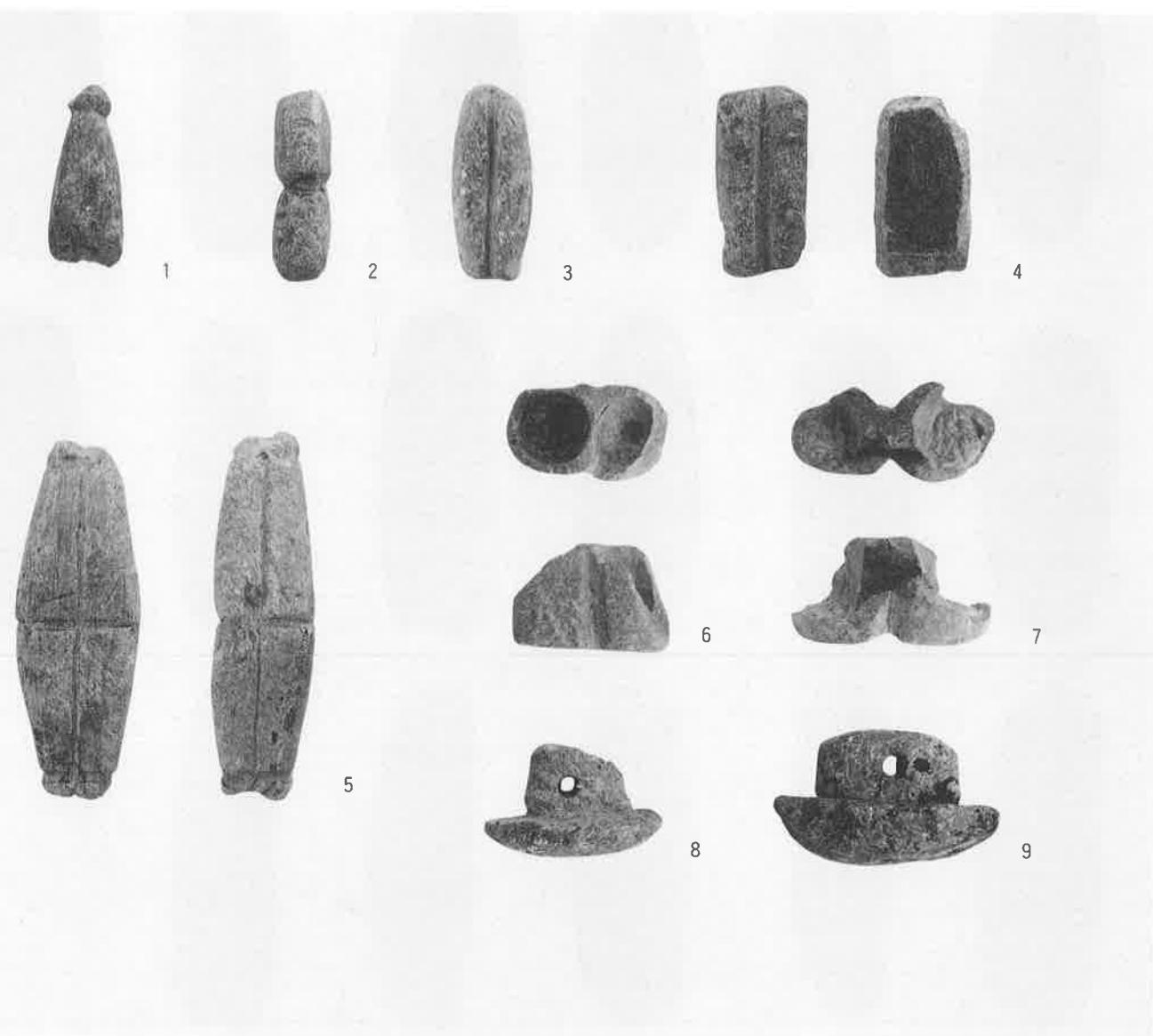
17

18

c. ST-01 (木棺墓) 出土土錘



a. ST-01 (木棺墓) 出土石錘



b. SD-01出土滑石製品



28



18

a. SD-01出土白磁

c. SD-02出土瓦



5



6



19

d. SD-02出土石錘



5



6



8



9

b. SD-01出土高麗青磁

e. SX-01周辺出土鉛製錘



10



11

f. SK-03周辺出土フィゴ羽口

報告書抄録

ふりがな	きぶね さんばんまついせき							
書名	木舟・三本松遺跡III							
副書名	深江地区ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次	IV							
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	村上 敦							
編集機関	二丈町教育委員会							
所在地	〒819-16 福岡県糸島郡二丈町大字深江1071				TEL (092) 325-1111			
発行年月日	1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木舟・三本松遺跡	福岡県糸島郡 二丈町大字深江字紫添	40462		33° 30' 50"	130° 9' 00"	19951114 19960131	3,600m ²	県営ほ場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
木舟・三本松遺跡	墓群その他	弥生時代 平安時代	甕棺墓 9基 木棺墓 溝状遺構	碧玉製管玉 19 土錘、石錘、白磁碗 土師器、黒色土器、陶磁器		副葬品を伴う弥生時代中期の甕棺墓群		

木舟・三本松遺跡III

二丈町文化財調査報告

第15集

平成9年3月31日

発行 二丈町教育委員会
福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地

印刷 株式会社西日本新聞印刷

